

# 西洋史研究者オットー・ブルンナー (1889-1982) の書簡<sup>1</sup>

小林亜沙美

## 1. はじめに

第1次世界大戦後の混乱期であった1920年代にウィーン大学、ウィーン古文書館、オーストリア歴史研究所という歴史学における名門機関で経験と知識と人脈を獲得し、大成した数多くの歴史学者の中にオットー・ブルンナーという人物がいた。第2次世界大戦中、ナチ党の政策を推進しウィーン大学教授の地位まで上り詰めた彼は、1945年のドイツ敗戦後、公職追放の処罰を受けた。だが、それから10年もしないうちに今度は西ドイツのハンブルク大学の教授として歴史学界に返り咲いた。その後、彼は後学の育成を通じ多くの歴史学者を輩出し、活発な研究活動を通じてドイツ国内の歴史学の分野だけでなく、国際的で学際的な学術舞台で「西ドイツ歴史学界の長老」<sup>2</sup>としてその影響力を示した。以上の経歴は、戦後ドイツの歴史学についての学術史研究においてブルンナーが注目されるに十分であると言えよう<sup>3</sup>。昨今のドイツではコーテューム(Hans-Henning Kortüm)とブレンクナー(Reinhard Blänkner)が、特に戦後の歴史修正主義的側面を慎重に分析しながら、オットー・ブルンナーが戦後発表した学説のナチ的性格

---

● 文献に関する省略記号：KLEE = Klec, E., *Das Personenlexikon zum Dritten Reich. Wer war was vor und nach 1945*, 5. Aufl., Frankfurt am Main, 2021; NDB = *Neue Deutsche Biographie*; ÖBL = *Österreichisches Biographisches Lexikon 1815–1950*.

<sup>1</sup> 本稿の発表は「就実大学研究助成金(2021年10月から2022年9月)」を受けた研究の成果の一部である。

<sup>2</sup> ベーター・シュットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』(Orig. SCHÖTTLER, P. (ed.), *Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918–1945*, Frankfurt am Main 1997) 名古屋大学出版会、2001年、267頁。

<sup>3</sup> ブルンナーについてのこれまでの先行研究は拙論でまとめている。拙論「オットー・ブルンナー(1898–1982)の1920年代の功績に見る後の「ナチの歴史家」の萌芽」『就実論叢』51(2021)65–78頁; 拙論「ドイツ国境地域における「沈黙の下層階級、農民」とは一期社会史研究テーマかナチの歴史叙述材料か?」『就実大学史学論集』36(2021)219–253頁。

の有無や程度、それらの学説が今後の歴史学でどの様に捉えられていくべきか、という点について、様々な考察を行っている<sup>4</sup>。

20世紀の知識人に関する学術史研究にとって重要な史料は、調査対象者の個人情報に関する様々な公的書類、各人の発表した著書や論文、講演原稿、未刊行論文、考察スケッチなどのメモ、公私にわたり交わされた書簡など、多岐に及ぶ。ドイツでは有名政治家などはもちろん、大学教授などの知識人が死去すると、その旧蔵書をはじめ、残存した各種書類や、手稿やタイプライター稿を含んだ執筆物が大学図書館や古文書館などで保存されることが多い。オットー・ブルナーの旧蔵書はというと、様々な経緯を経て、1987年中央大学図書館に買い取られた<sup>5</sup>。当時、同学部文学部で教授を勤めていた西洋史学者平城昭介は買い取られたばかりの旧蔵書の目録を作成するにあたり、ブルナーが当然所有していたと思われる文献がそこに欠落していることを明らかにした。そして平城はその原因を、ブルナーが戦後の公職追放を受けていた間に、将来の身を案じて彼がそれまで所有していたナチ関連の書物や資料などを一斉に整理したからなのではないか、と推測した<sup>6</sup>。同様のことを先述のコーテュームも述べている。コーテュームはブルナー旧蔵書の数が他の同時代の歴史学者と比べて少なく、特に書簡は非常に少数であること指摘し、ブルナーが意図的に自身のナチ的な痕跡を「見事に (erfolgreich) 消去した」とさえ述べた<sup>7</sup>。知識人たちが書き残した書簡は学術史研究では非常に貴重な一次史料である。例えばハンブルク大学歴史学科でブルナーの先代として教鞭をと

---

<sup>4</sup> ブレンクナーはその研究の最新の状況を2022年11月24日にミュンヘンのモヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ協会で行われた講演 „Otto Brunner (1898-1982). Denkwege auf der Suche nach Ordnung“ で発表した (MGH ホームページ、<https://www.mgh.de/de/blog/post/online-vortraege-2022-23>、最終閲覧2022年11月27日)。その他の先行研究については拙論、特に「ドイツ国境地域」『就実大学史学論集』36 (2021)、220—221頁 (および注9—11) 参照。

<sup>5</sup> 平城昭介「オットー・ブルナー文庫」『中央大学図書館だより』13 (1987)、5—7頁。

<sup>6</sup> 同上、6頁。他にも平城は、ブルナーが最後に生活したハンブルク以外の土地、例えば実家ウィーンにも蔵書を置いていたこともハンブルクの蔵書が少なかった理由のひとつとして推測した。

<sup>7</sup> KORTÜM, H.-H., Otto Brunner über Otto den Großen. Aus den letzten Tagen der reichsdeutschen Mediävistik, in: *Historische Zeitschrift* 299 (2014), 297—333, 299.

っていたヘルマン・オーバンに関していうと、彼の旧蔵書の中に保管されていた書簡、即ちオーバン宛の書簡、およびその他の知識人たちの旧蔵書の中に保管されていたオーバン執筆の書簡が、書簡集としてまとめられて翻刻され、戦前・戦中・戦後のドイツ歴史学研究しにとって重要な史料となっている<sup>8</sup>。書簡はそもそも残るとすれば受取人の手元に残ることが通常である。しかしそれ以外に、差出人が書簡を作成し、発送前にそれを複写し、まるで現代の e-mail の送信箱機能の様に自身の手元に残すこともあった。この様に書簡はその性格上その伝来様式が様々であり、先に述べたようにブルンナーの旧蔵書から書簡が僅かにしか見つからないのであれば、彼の書簡の差出人の手元に保管されていた書簡や、彼に送られた書簡の複写に望みを託し探すしかないであろう。

以上を踏まえ本稿では、オットー・ブルンナーが執筆した、もしくは彼に宛てられた書簡に注目し、今後のブルンナー研究への貢献を目標にそれを翻刻する。本稿で扱う書簡は葉書か便箋に書かれたものであり、一部の葉書や便箋にはブルンナーが所属していた研究機関の住所などがレターヘッドという形で印刷されていた。また 1950 年代以降の書簡の中には手稿に加えてタイプライター稿も多い。これら史料の所在は先行研究の他、Kalliope-Verbund<sup>9</sup>というドイツ国内の古文書館や図書館に保存されている様々な知識人や出版社などの遺産・旧蔵書についてのデータバンクで明らかにした。そして、各機関で該当史料を閲覧、そして可能であれば複写した。なお本稿における一連の史料調査は、個人情報保護目的で遺産等保管物の公開制限期間を規定するドイツ連邦共和国の Bundesarchivgesetz (連邦アーカイブ法) に従っている。後述のドイツ文学文書館マールバッハ(DLA Marbach)が所蔵するラインハルト・コゼレック旧蔵書内の史料は、著者が同文書館を訪問した 2022 年 8 月の時点で未だ公開制限期間にあったが、コゼレックの遺産管理人より特別許可を受け、史料調査を行うことができた<sup>10</sup>。

---

<sup>8</sup> MÜHLE, E. (ed.), *Briefe des Ostforschers Hermann Aubin aus den Jahren 1910–1968*, Marburg 2008. オーバンについてはペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』265 頁参照。

<sup>9</sup> Kalliope Verbundkatalog (<https://kalliope-verbund.info/de/index.html>, last access 2022.11.28).

<sup>10</sup> An dieser Stelle bedanke ich mich ganz herzlich bei Frau Heidrun Fink im Handschriftensaal des DLA Marbach für ihre Unterstützung sowie bei Frau Bettina Rickert (für die

## II. 図書館および古文書館、及び保存されている文庫名等

本稿で翻刻する史料は以下の古文書館、図書館に保存されている。また、一部の史料は以下の様に特定人物の旧蔵書群の中に保管されている。

- ゲッティンゲン大学図書館・国立図書館、カール・ブランディ<sup>11</sup>旧蔵書（以下、SUB Göttingen, NL Karl Brandi）
- ゲッティンゲン大学図書館・国立図書館、ヘアマン・ハインペル<sup>12</sup>旧蔵書（以下、SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel）
- テューリンゲン＝イエーナ大学図書館・州立図書館、ディーデリヒス<sup>13</sup>旧蔵書（以下、TUL Jena, NL Diederichs）
- ドイツ文学文書館マールバッハ、ハンス・エーリヒ・ノッサック<sup>14</sup>旧蔵書（以下、DLA Marbach, NL Hans Erich Nossack）
- ドイツ文学文書館マールバッハ、ラインハルト・コゼレック<sup>15</sup>旧蔵

---

Erbengemeinschaft nach Prof. Dr. Reinhart Koselleck) dafür, dass mir im Sommer 2022 die Einsicht in die sowie die Arbeit mit den Unterlagen des NL Koselleck im DLA Marbach genehmigt wurde.

<sup>11</sup> カール・ブランディ(Karl Brandi, 1868–1946)、ドイツ人歴史学者、ゲッティンゲン大学で1902年から1936年まで教鞭をとる。KRÜGER, S., Brandi, Karl Maria Proper Laurenz, in: *NDB* 2 (1955), p. 523; KLEE, p. 70; ペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』267頁。

<sup>12</sup> ヘアマン・ハインペル(Hermann Heimpel, 1901–88)、ドイツ人歴史家、ゲッティンゲン大学教授。BOOCKMANN, H., *Der Historiker Hermann Heimpel*, Göttingen 1990; KLEE, p. 239; ペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』268–269頁。

<sup>13</sup> 1896年にオイゲン・ディーデリヒス(Eugen Diederichs, 1867–1930)が創立したオイゲン・ディーデリヒス出版は、1904年にその本社をドイツ、テューリンゲン州東の町イエーナに移した。オイゲン死去後は、同出版社はその息子ニールス(Niels, 1902–73)とペーター(Peter, 1904–90)の時代に特にナチ時代に学術書を多く出版し発展した。LEYEN, F., Diederichs, Eugen, in: *NDB* 3 (1957), pp. 637–638; KLEE, p. 107.

<sup>14</sup> ハンス・エーリヒ・ノッサック(Hans Erich Nossack, 1901–77)、ドイツ人作家、1930年にドイツ教壇等に入り、ナチ支配下では出版禁止命令といった罰を受けた。DIECKS, T., Nossack, Hans Erich, in: *NDB* 19 (1999), pp. 348–349.

<sup>15</sup> ラインハルト・コゼレック(Reinhart Koselleck, 1923–2006)、ドイツ人歴史家、特に歴史学理論、概念・言語史、社会・法制・国制史分野でブルンナーと戦後共同で研究活動を行った。その結実の最も有名なものがコゼレック、ブルンナー、ヴェルナー・コンツ

書（以下、DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck）

- ハイデルベルク大学図書館（以下、UB Heidelberg）
- バーゼル大学図書、カール・ヤコブ・ブルクハルト<sup>16</sup>旧蔵書（以下、UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt）
- バイエルン国立図書館ミュンヘン、ブルノ・スネル<sup>17</sup>旧蔵書（以下、BSB München, NL Bruno Snell）
- フランクフルト大学図書館（以下、UB Johann Christian Senckenberg）
- ボン大学図書館・州立図書館、エーリッヒ・ロートハッカー<sup>18</sup>旧蔵書（以下、ULB Bonn, NL Erich Rothacker）
- ミュンヘン・ルードヴィヒ・マキシミリアン大学図書館、ルードヴィヒ・シュタインベルガー<sup>19</sup>旧蔵書（以下、LMU München UB, NL Ludwig Steinberger）
- ライプニッツ地域学研究所、エミル・マイネン<sup>20</sup>旧蔵書（以下、IfL

---

エ(Werner Conze, 1910–86, ベーター・シェットツラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』261–262頁)が共同で編集した *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. 9 Bänden*, Stuttgart 1972–1997. である。Bibliotheksservice-Zentrum Baden-Württemberg (<http://swb.bsz-bw.de/DB=2.114//CMD?ACT=SRCHA&IKT=2011&TRM=gnd:119120224&REC=2&COOKE=Us998.Pbszgast,I2017,B20728+,SY,NRecherche-DB,D2.114,E27062da4-0,A,H,R210.236.12.222,FY>, last access 21.11.2022); ベーター・シェットツラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』267頁。

<sup>16</sup>カール・ヤコブ・ブルクハルト(Carl Jacob Burckhardt, 1891–1974)。スイス人歴史学者、スイス公使館員、国際赤十字委員会、チューリヒ大学で教授資格取得。

RUFFIEUX, R.: Carl Jacob Burckhardt, in: *Historisches Lexikon der Schweiz* (<https://hls-dhss.ch/de/articles/011624/2019-10-24> last access 2022.11.21).

<sup>17</sup>ブルノ・スネル(Bruno Snell, 1896–1986)、徹底した反ナチ主義者であったが古典学者として 1931 年から 1959 年までハンブルク大学で教授を、更に戦後は学部長・学長を務めた。VOIGT, E., Snell, Bruno, in: *NDB* 24 (2010), pp. 518–519.

<sup>18</sup>エーリッヒ・ロートハッカー(Erich Rothacker, 1888–1965)、ドイツ人哲学者。PERPEET, W., Rothacker, Erich, in: *NDB* 22 (2005), pp. 117–118; KLEE, p. 510.

<sup>19</sup>ルードヴィヒ・シュタインベルガー(Ludwig Steinberger, 1879–1968)、ドイツ人歴史家。1933年にチロルへ逃亡し、更にナチによるオーストリア併合後スイスへ逃亡、1946年ドイツへ帰還。Kalliope Verbund (<https://kalliope-verbund.info/de/eac?eac.id=11724645X>, last access 21.11.2022).

<sup>20</sup>エミル・マイネン(Emil Meynen, 1902–94)、ドイツ人地理学者、1937年NSDAPの構成員となり、ナチ政権下でその勢力拡大政策に地理学者として加担。KLEE, p. 409.

### III. 翻刻に際しての注意事項

- パンクチュエーションをはじめ、史料の誤字・脱字・文法の誤用は文意の通じる限り、または数字等が欠落している場合などは、そのまま翻刻し、それぞれの単語末に[!]と記す。
- 染みや切断という物理的理由で翻刻が不可能な箇所は[...]と記し、章末注にその翻刻不可能な理由を説明をする。
- 史料が複数ページからなる場合は、改ページ箇所に//を記す。
- 史料の見た目に関する特徴で翻刻ができるもの（例：大文字、小文字、下線、拡張字幅など）はそれを翻刻に反映する。翻刻ができないもの（例：一部が住所スタンプや印刷済みレターヘッドなどの場合、全体がタイプライター稿の中で一部手書きの場合、便箋が切断されて翻刻不可能箇所がある場合など）は章末注に記す。章末注は注記号を abc…とする。
- なお書簡内で登場する人物は、可能な限りその特定を行った。人物についての説明は各ページ下の脚注に記し、脚注記号は 123…とし、本稿全体での通し番号とする。書簡内で記されている文献に関する書誌情報についての説明、専門用語の説明も同様に行う。

### IV. 史料翻刻

#### 1.

1923年2月21日

オットー・ブルンナーがカール・ヤコブ・ブルクハルトに宛てた書簡（手稿、2頁）

所蔵：UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt

請求記号：NL 110: G 982, 1

Wien, den 21. Februar 1923

Sehr geehrter Herr!

Herr Dr. Oskar Schmidt übermittelte mir gestern Ihre Zusage und Ihre

Bedingungen. Ich bin sehr gerne bereit nach Basel zu kommen und die von Ihnen gewünschte Arbeit, über deren Natur mich Herr Dr. L. Micheli näher unterrichtete, durchzuführen. Ich bin augenblicklich Mitglied des österr. Institutes für Geschichtsforschung, das ich im Juli mit einer Schlußprüfung zu beenden gedenke. Da nun die dazu erforderliche schriftliche Arbeit bereits von mir fertiggestellt ist, wäre es mir möglich etwa von 10. März bis Mitte Mai für Sie zu arbeiten. //

Ich hatte bereits Gelegenheit Herrn Dr. Micheli einige Bedenken vorzubringen, so daß ich nicht französisch spreche, sondern nur lese u. meine Kenntnisse in Schweizer Geschichte das allgemeine Maß des Nicht-Schweizers nicht übersteigen. Doch hielt Herr Dr. Micheli dies nicht für erforderlich.

Sollten Sie, sehr geehrter Herr Doktor, einen positiven[!] Entschluß fassen, so darf ich Sie bitten mir in nur bald mitzuteilen, damit meine eventuelle Abreise keine weiteren Verzögerungen erfährt.

Ich verbleibe mit den Ausdrücken der vorzüglichsten Hochachtung

Ihr ergebener

Dr. Otto Brunner

Wien I Universität

Öst. Institut f. Geschichtsforschung

2.

1923 年 3 月 11 日

オットー・ブルンナーがカール・ヤコブ・ブルクハルトに宛てた手紙（手稿、1 頁）

所蔵：UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt

請求記号：NL 110: G 982,2

Wien, den 11. März 1923  
I Universität, Öst. Institut  
für Geschichtsforschung.

Hochverehrter Herr Doktor!

Gestern empfing ich von Dr. Oskar Schmidt die Mitteilung, daß Sie mein Kommen wünschen. Da ich bisher auf meinen Brief vom 26. vor .M.<sup>a</sup> keine Antwort erhielt, so sehe ich nicht klar, wann ich abreisen soll und habe mich daher entschlossen, die Abreise auf Ende dieser Woche zu verschieben. Ich wäre bereit, Samstag den 17. März von hier wegzufahren. Leider steht mir nur ein Zug zur Verfügung, der in Basel am 18., um 10<sup>h</sup> 15 Minuten abends eintreffen würde. Angesichts dieser ungelegenen Zeit wäre es mir sehr erwünscht, wenn ich von meiner Abreise noch eine Verständigung von Ihnen erhalten könnte. Jedenfalls aber bitte ich Sie dringend, mich für den Fall, daß Sie mein Kommen zu dieser Zeit nicht wünschen, davon zu verständigen.

Ich verbleibe mit dem Ausdrücken der vorzüglichsten Hochachtung

Ihr ergebener Dr. Otto Brunner.

---

<sup>a</sup> vor Monat

3.

1927年12月27日

オットー・ブルンナーがカール・ヤコブ・ブルクハルトに宛てた手紙(手稿、5頁)

所蔵 : UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt

請求記号 : NL 110: G 982, 3

Wien, den 27. Dez. 1927

Sehr geehrter Herr Doktor!

Ich bitte vielmals die späte Beantwortung Ihres freundlichen Schreibens entschuldigen zu wollen. Ich habe mich sehr gefreut, von Ihnen nach so langer Zeit wieder einmal zu hören und bin selbstverständlich mit Vergnügen bereit, Ihnen in der Bibliographie zur österr. Geschichte an die Hand zu geben.

Ich habe fürs erste, eine Zusammenstellung der im letzten Jahrzehnt erschienenen wichtigeren Bücher zur äußeren und inneren Politik der Monarchie gemacht. Allerdings kommt in der vorliegenden Literatur eigentlich nur die Politik der Wiener Zentralstellen zum Ausdruck, während für die nationale Bewegung etc. in einer Weltsprache nur sehr wenig vorhanden ist.

Ich hoffe, daß die von mir angeführten Bücher für eine erste Übersicht genügen. Ich würde mich sehr freuen, wenn sie[!] über einzelne Fragen noch weitere Spezialliteratur zusammengestellt wünschen sollten. //

Mein persönliches Schicksal hat sich seit einem Jahr günstig gestaltet. Nachdem ich nach Abschluß meiner Universitätsstudien mehr als 3 Jahre als unbesoldeter Volontär am Staatsarchiv verbracht habe, bin ich nun seit mehr als einem Jahr ernannt und habe so die Möglichkeit, auch wissenschaftliche Studien zu treiben.

Ihre sehr freundliche Einladung werde ich wohl angesichts der beschränkten Urlaubszeit und anderer Dinge wegen, nicht so bald Folge leisten können.

Mit den besten Grüßen

bin ich Ihr ergebener  
Otto Brunner//

Bibliographie: Richard Charmatz, *Wegweiser durch die Literatur der österreichischen Geschichte 1912*.<sup>21</sup>

Mathilde Uhlirz, *Handbuch der Geschichte Österreichs und seiner Nachbarländer Böhmen und Ungarn 1927*.<sup>22</sup> (Bisher der 1. Band, der bis 1780 reicht)

Zusammenfassende Darstellungen: F. M. Mayer, *Geschichte Österreichs mit*

---

<sup>21</sup> CHARMATZ, Richard, *Wegweiser durch die Literatur der österreichischen Geschichte*, Stuttgart 1912.

<sup>22</sup> UHLIRZ, Karl / UHLIRZ, Mathilde, *Handbuch der Geschichte Österreichs und seiner Nachbarländer Böhmen und Ungarn*, 1. Bd., Graz 1927.

besonderer Berücksichtigung des Kulturlebens. 2 Bände, 3. Aufl. 1909<sup>23</sup>  
(Gesichtskreis des Lehrers an Mittelschulen.)

Viktor Bibl, *Der Zerfall Österreichs*<sup>24</sup> (naiv liberalisierend, sieht die Hauptgründe des Zerfalls in der vormärzlichen Politik, ohne tiefere Darstellung der sozialen und nationalen Umschichtungen im 19. Jht.)

Als Übersicht brauchbar: Richard Charmatz, *Österreichs äußere (bezw. f. innere) Politik 1848-1918*[?], 3 Bändchen (aus *Natur v. Geisteswelt*)<sup>25</sup>

Auswärtige Politik:

Friedjung, *Kampf um die Vorherrschaft*<sup>26</sup>

Fr. Engel-Jánosi, *Graf Rechberg 1927*.<sup>27</sup>

Ed. Wertheimer, *Graf Julius Andrássy*<sup>28</sup>

Příbram[!], *Die Geheimverträge Österr-Ungarns 1. Bd.*<sup>29</sup>

–.–., *Austrian foreign policy 1908–18*<sup>30</sup> (mit Benutzung sonst unzugänglichen Archivalien.

a.o. Meyer, *Bismarcks Kampf mit Österreich an Frankfurter*

*Bundestag*.<sup>31</sup> //

Verfassung.

Die beste Übersicht über die innere Struktur der Monarchie in der Einleitung zu: Josef Redlich, *Österr. Regierung und Verwaltung im Weltkrieg* (Gesch. des Weltkriegs Ser. v. der Carnegie Stiftung)<sup>32</sup>

Josef Redlich, *Das österreichische Reichs- u. Staatsproblem 1920, 1926 (bis 1867)*.<sup>33</sup>

W. Schüssler, *Das Verfassungsproblem im Habsburgerstaat 1918*.<sup>34</sup>

August Fournier, *Österreichs Neubau unter Kaiser Franz Josef 1917*.<sup>35</sup>

---

<sup>23</sup> MAYER, Franz Martin, *Geschichte Österreichs mit besonderer Rücksicht auf das Kulturleben*, 2 Bände, 3. Aufl., Wien 1909.

<sup>24</sup> BIBL, Viktor, *Der Zerfall Österreichs*, 2 Bände, Wien 1922–1924.

<sup>25</sup> CHARMATZ, Richard, *Geschichte der auswärtigen Politik Österreichs im 19. Jahrhundert* (Aus *Natur und Geisteswelt*), 3 Bände, Leipzig 1912–1918.

<sup>26</sup> FRIEDJUNG, Heinrich, *Der Kampf um die Vorherrschaft in Deutschland 1859 bis 1866*, 2 Bände, Stuttgart 1899.

<sup>27</sup> ENGEL-JANOSI, Friedrich, *Graf Rechberg. Vier Kapitel zu seiner und Österreichs Geschichte*, München 1927.

<sup>28</sup> WERTHEIMER, Eduard von, *Graf Julius Andrássy, sein Leben und seine Zeit, nach ungedruckten Quellen*, 3 Bände, Stuttgart 1910.

<sup>29</sup> PRÍBRAM, Alfred Francis, *Die politischen Geheimverträge Österreich-Ungarns, 1879–1914, nach den Akten des Wiener Staatsarchivs*, Wien 1920.

<sup>30</sup> PRÍBRAM, Alfred Francis, *Austrian Foreign Policy 1908–18*, London 1923.

<sup>31</sup> MEYER, Arnold Oskar, *Bismarcks Kampf mit Österreich am Bundestag zu Frankfurt (1851–1859)*, Berlin 1927.

<sup>32</sup> REDLICH, Joseph, *Österreichische Regierung und Verwaltung im Weltkriege* (Österreichische und ungarische Serie. Carnegie-Stiftung für internationalen Frieden. Abteilung für Volkswirtschaft und Geschichte), Wien 1925.

<sup>33</sup> REDLICH, Joseph, *Das österreichische Staats- und Reichsproblem. Geschichtliche Darstellung der inneren Politik der habsburgischen Monarchie von 1848 bis zum Untergang des Reiches*, 2 Bände, Leipzig 1920–1926.

<sup>34</sup> SCHÜSSLER, Wilhelm, *Das Verfassungsproblem im Habsburgerreich*, Stuttgart/Berlin 1918.

<sup>35</sup> FOURNIER, August, *Österreich-Ungarns Neubau unter Kaiser Franz Josef I.*, Berlin/Wien 1917.

- Bernatzik, Die österr. Verfassungsgesetze<sup>36</sup>  
 Czedik, Zur Geschichte der österr. Ministerien 1861–1916, 4 Bände<sup>37</sup>/  
 umfangreiche Materialsammlung /  
 Louis Eisenmann, Le Compromis Austro-Hongrois<sup>38</sup>  
 Parteigeschichte: Ernst von Plener, Erinnerungen (3 Bände)<sup>39</sup> deutschliberal.  
 Ludwig Brügel, Gesch. der österr. Sozialdemokratie<sup>40</sup> (mit  
 politischen Rasonements[!] durchsetzte Aktenauszüge)  
 P. Molisch, Geschichte der deutschnationalen Bewegung in  
 Österreich, 1925<sup>41</sup>. //
- Weltkrieg: außer den zahlreichen Memorienwerken:  
 K. F. Novak, Der Sturz der Mittelmächte<sup>42</sup>  
 –.–, Chaos<sup>43</sup>  
 R. Fester, Die Politik Kaiser Karls<sup>44</sup>  
 Bertr. Auerbach, L'Autriche et la Hongrie pendant la guerre<sup>45</sup>
- Neue österreichische Biographie 1815–1918, Bisher 4 Bände<sup>46</sup>  
 Mit folgenden Biographien von Staatsmännern u. Militärs:  
 Kaiser Franz Josef<sup>47</sup>, Heinrich Lammasch<sup>48</sup>, Ernest von Körber<sup>49</sup>, Graf Stephan

<sup>36</sup> BERNATZIK, Edmund, *Die österreichischen Verfassungsgesetze. Mit Erläuterungen*, 2. Aufl., Wien 1911.

<sup>37</sup> CZEDIK, Alois Freiherrn von, *Zur Geschichte der K. K. Österreichischen Ministerien, 1861–1916*, 4 Bände, Wien/Leipzig 1920.

<sup>38</sup> EISENMANN, Louis, *Le Compromis Austro-Hongrois de 1867. Étude sur le dualisme*, Paris 1904.

<sup>39</sup> PLENER, Ernst von, *Erinnerungen*, 3 Bände, Stuttgart/Leipzig 1911–1921.

<sup>40</sup> BRÜGEL, Ludwig, *Geschichte der österreichischen Sozialdemokratie*, 5 Bände, Wien 1922.

<sup>41</sup> MOLISCH, Paul, *Geschichte der deutschnationalen Bewegung in Oesterreich von ihren Anfängen bis zum Zerfall der Monarchie*, Jena 1926.

<sup>42</sup> NOWAK, Karl Freidrich, *Der Sturz der Mittelmächte*, München 1921.

<sup>43</sup> NOWAK, Karl Freidrich, *Chaos*, München 1923.

<sup>44</sup> FESTER, Richard, *Die Politik Kaiser Karls*, München 1925.

<sup>45</sup> AUERBACH, Bertrand, *L'Autriche et la Hongrie pendant la guerre*, Paris 1925.

<sup>46</sup> BETTELHEIM, Anton (Hg.), *Neue österreichische Biographie. 1815–1918*, 4 Bände, Wien 1923–1927.

<sup>47</sup> フランツ・ヨーゼフ 1 世(Franz Joseph, 1830–1916)、オーストリア皇帝 (在位 1848–1916)。ANON., Franz Joseph (I.), K. von Österr., Kg. von Ungarn, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 4, 1956), pp. 351–352.

<sup>48</sup> ハインリヒ・ラツマシュ(Heinrich Lammasch, 1853–1920)、オーストリアの記者、政治家。GOLDINGER-VEROSTA, Lammasch, Heinrich, in: *ÖBL* 4 (Lfg. 20, 1969), pp. 415–416.

<sup>49</sup> エルネスト・フォン・ケルバー(Ernest von Koerber, 1850–1919)、オーストリア=ハンガリー帝国の政治家、2 度の首相経験者。LORENZ, Koerber, Ernest von, in: *ÖBL* 4 (Lfg. 16, 1966), pp. 44–45.

Tisza<sup>50</sup>, Edmund Friess<sup>51</sup>, Boroević<sup>52</sup>, Friedr. Graf Beck<sup>53</sup>, Kronprinz Rudolf<sup>54</sup>, Engelbert Pernerstorfer<sup>55</sup>, Kövess<sup>56</sup>, Ernst Plener<sup>57</sup>, Vogelsang<sup>58</sup>, Erzherzog Franz Ferdinand<sup>59</sup>, Viktor Adler<sup>60</sup>

---

<sup>50</sup> ティサ・カールマーン(Tisza Kálmán, 1861–1918)、ハンガリー貴族、政治家。オーストリア=ハンガリー帝国内におけるハンガリー王国の首相(在位 1875–90)。SZÁSZ, Z., Tisza von Borosjenő, Kálmán (Koloman), in: *ÖBL* 14 (Lfg. 65, 2014), pp. 356–357.

<sup>51</sup> (おそらく)ゴトフリード=エドムンド・フリース(Gottfried Edmund Friess, 1836–1904) オーストリアのベネディクト会士、歴史家、図書館員、文書館員。LAUCHERT, F., Frieß, Gottfried Edmund, *Biographisches Jahrbuch und deutscher Nekrolog* 9 (1906), pp. 171–172; ANON., Friess, P. Gottfried, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 4, 1956), p. 368.

<sup>52</sup> スヴェトザル・ボロイエヴィッチ(Svetozar Boroević von Bojna, 1856–1920)、オーストリア=ハンガリー帝国軍人。ANON., Boroević von Bojna, Svetozar, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 2, 1954), p. 103.

<sup>53</sup> フリードリヒ・フォン・ベック=ルジコウスキ(Friedrich von Beck-Rzikowsky, 1830–1920)、オーストリア=ハンガリー帝国軍人。ANON., Beck-Rzikowsky, Friedrich Gf., in: *ÖBL* 1 (Lfg. 1, 1954), pp. 61–62.

<sup>54</sup> オーストリア=ハンガリー帝国皇太子ルドルフ(Rudolf, Kronprinz von Österreich und Ungarn, 1858–89)。HAMANN, B., Rudolf, Franz Karl Josef Erzgh. von Österr., Kronprinz, in: *ÖBL* 9 (Lfg. 44, 1987), pp. 315–316.

<sup>55</sup> エンゲルベルト・ペルネーストルファー(Engelbert Pernerstorfer, 1850–1918)、オーストリアの政治家、記者。HERLITZKA, E. K., Pernerstorfer, Engelbert, in: *ÖBL* 7 (Lfg. 35, 1978), p. 427.

<sup>56</sup> ゲーザ・ケーヴェス(Géza Baron Kövess von Kövessháza, 1896–1977)、オーストリアの軍人、歴史家。STOY, M., *Das Österreichische Institut für Geschichtsforschung 1929–1945*, Wien 2007, p. 344.

<sup>57</sup> エルンスト・フォン・ブレナー(Ernst von Plener, 1841–1923)、オーストリアの政治家、財務大臣などを務める。エルネスト・フォン・ケルパー、ヨセフ・レードリヒなどは政友であった。GOLDINGER, W., Plener, Ernst Frh. von, in: *ÖBL* 8 (Lfg. 37, 1980), pp. 122–123.

<sup>58</sup> (おそらく)カール・フォン・フォーゲルザング(Karl Freiherr von Vogelsang, 1818–90)、オーストリアの評論家、キリスト教社会主義的政治家。BRUCKMÜLLER, E., Vogelsang, (Hermann Ludolf) Karl Emil Frh. von, in: *ÖBL* 15 (Lfg. 69, 2018), pp. 321–322.

<sup>59</sup> フランツ・フェルディナント・フォン・エスターライヒ=エステ(Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich-Este, 1863–1914)、1896年以降オーストリア=ハンガリー帝国の皇位継承者。1914年サラエボ事件で暗殺された。この暗殺事件が第1次世界大戦のきっかけとなった。ANON., Franz Ferdinand, Erzgh. von Österr.-Este, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 4, 1956), pp. 350–351.

<sup>60</sup> ヴィクトル・アードラー(Viktor Adler, 1852–1918)、医者、社会民主党員、政治家。ANON., Adler, Viktor, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 1, 1954), pp. 7–8.

4.

1928年8月21日

オットー・ブルンナーがカール・ヤコブ・ブルクハルトに宛てた手紙(手稿、2頁)

所蔵：UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt

請求記号：NL 110: G 982, 4

Wien, den 21. Aug. 1928

Hochverehrter Herr Doktor!

Ich muss Sie sehr bitten, mein langes Schweigen gütigst zu entschuldigen. Es war dadurch verursacht, daß ich einen bekannten Herrn, von dem ich wusste, daß er sich längere Zeit mit dem Plan getragen hatte, eine Arbeit über Felix Schwarzenberg<sup>61</sup> zu schreiben, nicht auffinden konnte. Ich habe ihn gesprochen und erfahren, daß er sein Projekt nicht weiter verfolgt.

Eine Biographie oder politische Monographie über Schwarzenberg ist gewiß eine der notwendigsten Arbeiten, die auf dem Gebiete der österreich. Geschichte zu machen wären. Über seine Innenpolitik steht ja bei Friedjung<sup>62</sup> und Josef Redlich<sup>63</sup> ziemlich viel. Dagegen fehlt eine Darstellung seiner Außenpolitik. Dafür besitzen wir hier ja reiches Material. Schlimmer steht es mit persönlichen Dokumenten. Wie ich Ihrem Briefe entnehme, // ist im Schwarzenbergischen Zentralarchiv nichts vorhanden. Unser Staatsarchiv besitzt nun wohl einen „Nachlaß Schwarzenberg“. Das ist aber der übliche Schreibtischnachlaß eines Staatsmannes, einzelne reservierte Aktenstücke, politische Korrespondenzen u. dergl. Im Einzelnen geschichtlich sehr wertvoll, als Quelle für Schwarzenbergs Persönlichkeit kaum aufschlußreicher als amtliche Materialien.

Ob es möglich ist, über Schw. Tätigkeit vor 1848/49 eine über die äußere Darstellung seiner diplomatischen Wirksamkeit hinausführende Darstellung zu geben, scheint mir recht zweifelhaft. Jedenfalls würde ich sehr freuen, wenn diese Arbeit Sie zu einem längeren Aufenthalt in Wien veranlassen würde.

Ich bin mit der ausdrücklichen meiner besonderen Verehrung.

Ihr sehr ergebener  
Otto Brunner

---

<sup>61</sup> フェリックス・ツー・シュヴァルツェンベルク(Felix Fürst zu Schwarzenberg, 1800–52)、オーストリア貴族、軍事・外交における政治家、外相、首相(1848–51)を務めた。LIPPERT, S., Felix Prinz zu Schwarzenberg, in: *ÖBL* 12 (Lfg. 55, 2001), pp. 15–18.

<sup>62</sup> ハインリヒ・フリードユング(Heinrich Friedjung, 1851–1920)、オーストリアの歴史家、政治家、評論家。WLADIKA, M., Friedjung, Heinrich, in: *ÖBL* 1 (Lfg. 4, 1956), pp. 362–363.

<sup>63</sup> ヨセフ・レードリヒ(Josef Redlich, 1869–1936)、オーストリアの法学者、政治家。FELLNER, F., Redlich, Josef, in: *ÖBL* 9 (Lfg. 41, 1984), pp. 10–11.

5.

1928年12月4日

オットー・ブルンナーがカール・ヤコブ・ブルクハルトに宛てた手紙(手稿、2頁)

所蔵：UB Basel, NL Carl Jacob Burckhardt

請求記号：NL 110: G 982, 5

Wien, den 4. Dez. 1928

Hochverehrter Herr Dozent!

Da mir bekannt war, daß Prof. v. Srbik<sup>64</sup> über die Außenpolitik des Fürsten Felix Schwarzenberg verschiedene Dissertationen arbeiten lässt, habe ich ihn über seine Absichten befragt. Er antwortete mir, daß er wohl verschiedene Dissertationen über dieses Thema gegeben habe, daß jedoch keine davon in absehbarer Zeit im Druck erscheinen werde und daß auch er selbst über die Zeit Schwarzenbergs nicht arbeiten werde.

Da nun das wesentliche Material über Schwarzenbergs Außenpolitik hier im Archiv liegt, kann ich wohl mit Bestimmtheit sagen, daß das Thema gegenwärtig nicht bearbeitet wird. So dürfte wohl Ihrer Absicht nichts im Wege stehen und ich werde mich sehr // freuen, Sie bald bei uns begrüßen zu dürfen. Selbstverständlich stehe ich Ihnen in jeder Hinsicht, soweit dies in meinen Kräften steht, zur Verfügung.

Ich glaube, daß es für unsere österreichische Geschichte sehr von Nutzen wäre, wenn Sie sich als Schweizer und ehemaliger Diplomat dieses Gegenstandes annehmen wollten.

Genehmigen Sie die Ausdrücke meiner besonderen Verehrung

Ihr

Otto Brunner

6.

1934年3月26日

ルードヴィヒ・シュタインベルガーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙(タイプライター稿、署名無し、1頁)<sup>a</sup>

所蔵：LMU München UB, NL Ludwig Steinberger

請求記号：Nachl. L. Steinberger, Korr. Brunner 1r

---

<sup>64</sup> ハインリヒ・フォン・ズルビック(Heinrich von Srbik, 1878–1951)、オーストリアの歴史家、ウィーン大学教授、同大学におけるオットー・ブルンナーの師、大ドイツ主義者。戦時中のナチ的学術活動が原因で戦後公職追放となり、教壇に戻ることはなかった。FELLNER, F., Srbik, Heinrich Ritter von, in: *NDB* 24 (2010), pp. 773–775; KLEE, p. 593; ペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』264頁。

Innsbruck Claudiastr. 18/2 1, 26.3.34  
An verehrl. Schriftleitung der Mitteilung des Oesterr. Institutes für  
Geschichtsforschung

Sie waren so freundlich, in Bd. 45, 510f eine Besprechung von mir über ein ortsnamenkundl. Werk aufzunehmen, nachdem bereits vor Jahren in den Bden 32, 33 u. 37 meine Studien über Namen und Geschichte des Brennerpasses erschienen waren. In der Zeitschr. f. Ortsnamenf. 3, 223ff u. 5, 176ff (s. auch Zeitschr. f. Ortsnamenf. 6, 148ff. u. 197ff.) habe ich O. Stolz<sup>65</sup> Ausbreitung des Deutschtums in Südtirol Bde 1 u. 2 besprechen und dem Herausgeber dieser Zeitschrift auf Verlangen eine Bespr. über den 3. Bd. des Stolzchen Werkes sowie eine solche über das für die altbayer. Frühgeschichte wichtige Werk von Jos. Sturm<sup>66</sup>, Anfänge des Hauses Preysing, München 1931 eingeliefert und auf die Bespr von Stolz Bd 3 in meinem kritischen Sammelbericht über die Erforschung der Ortsnamen im deutschen u. ladinischen Tirol (1908 bzw.) 1914–1932 in Zeitschr. f. Ortsnamenf. 9, 71 im Voraus verwiesen. Inzwischen hat mir aber der Herausgeber der Zeitschr. f. Ortsnamenf. die zwei Besprechungen über Stolz Bd 3 und Sturm ohne jede sachliche Begründung zurückgeschickt. Ich erlaube mir nun die höfliche Anfrage, ob Sie – natürlich unter Vorbehalt der Vorlage der zwei Maschinogramme – grundsätzl. bereit wären, zum mindesten die Stolzbespr. in die MOeG in irgend einer Form aufzunehmen; mit ihr liessen sich vielleicht einige Worte über andere Deuschsüdtirol betreffende Veröffentlichungen wie CBattisti's *Popoli e lingue local dell'AltoAdige*<sup>67</sup> (vgl. Zeitschr. f. Ortsnamenf. 9, 69) und des nämlichen *Nomi locali dell'AltoAdige Bolzanino*<sup>68</sup> (*Archivio per l'AltoAdige* 28, 1933, 5ff) verbinden. In vorzüglicher Hochachtung ergebenst

ao. UnivProf. aus München

---

<sup>a</sup> この手紙は、後述 8 番の手紙 (1934 年 6 月 15 日付、ルードヴィヒ・シュタインベルガーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙) の裏面に記されていた。

7.

1934 年 6 月 14 日

オットー・ブルンナーがルードヴィヒ・シュタインベルガーにあてた葉

---

<sup>65</sup> オットー・シュトルツ (Otto Stolz, 1881–1957)、オーストリア出身の歴史家、特にチロル地方についての地域史研究者、教授資格は取得していたが教授職にはありつけず、古文書館長として従事。MAZOHL, B., Otto Stolz, in: *Società di Studi Trentini di Scienze Storiche* (<https://www.studitrentini.eu/otto-stolz/>, last access 2022.11.27).

<sup>66</sup> ヨゼフ・シュトゥム (Josef Sturm, 1883–1956)、ドイツ出身で主にバイエルンの歴史を専門にした地域史研究者、古文書館員。Kalliope Verbund (<https://kalliopeverbund.info/de/eac?eac.id=117364029>, last access 2022.11.27).

<sup>67</sup> Battisti, Carlo, *Popoli e lingue nell'Alto Adige*, Firenze 1931.

<sup>68</sup> Battisti, Carlo, I nomi locali dell'Oltradige Bolzanino, in: *Archivio per l'Alto Adige* 28 (1933), 5–166.

書（手稿、2頁）

所蔵：LMU München UB, NL Ludwig Steinberger

請求記号：Nachl. L. Steinberger, Korr. Brunner 2

Schriftleitung der MITTEILUNGEN des Österreichischen Instituts für  
Geschichtsforschung WIEN, I. UNIVERSITÄT<sup>a</sup>

Herrn Univ. Professor  
Dr. Ludwig Steinberger  
Innsbruck  
Claudiastr. 18/21 //

Wien, 14. Juni 1934

Sehr geehrter Herr Kollege! Ihre erste Zuschrift ist leider abhanden gekommen. Ich  
bitte daher um Wiederholung Ihres Inhalts, damit ich Sie beantworten kann.

In ausgezeichnete Hochachtung  
Ihr ergebener  
Brunner

---

<sup>a</sup> Schriftleitung – UNIVERSITÄT レターヘッド、葉書に印刷済み

8.

1934年6月15日

ルードヴィヒ・シュタインベルガーがオットー・ブルンナーに宛てた手  
紙（タイプライター稿、署名有り、1頁）<sup>a</sup>

所蔵：LMU München UB, NL Ludwig Steinberger

請求記号：Nachl. L. Steinberger, Korr. Brunner 1v

15.6.34

Sehr geehrter Herr Kollege!

Auf Ihren Wunsch vom 14. übersende ich Ihnen umgehend den  
Durchschlag[!] meines ersten Briefes vom 26. März 1934 u. ersuche höflich um  
dessen Rückgabe. Rückporto lag sowohl diesem Briefe als meiner Postkarte vom  
24.4.34 bei. In vorzüglicher Hochachtung erg.

L. Steinberger<sup>b</sup>

---

<sup>a</sup> この手紙は、上述6番の手紙（1934年3月26日のルードヴィヒ・シュタインベル  
ガーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙）の裏面に記されていた。

<sup>b</sup> L. Steinberger 手書き

9.

1936年1月20日

オットー・ブルンナーがルードヴィヒ・シュタインベルガーに宛てた手

紙（手稿、1頁）

所蔵：LMU München UB, NL Ludwig Steinberger

請求記号：Nachlass L. Steinberger Korr. Brunner 3

MITTEILUNGEN DES ÖSTERREICHISCHEN INSTITUTS FÜR  
GESCHICHTSFORSCHUNG SCHRIFTFLEITUNG: WIEN I. UNIVERSITÄT  
WIEN, am<sup>a</sup> 20. Juni 1936

Sehr geehrter Herr Professor!

Leider ist inzwischen im 4. Heft d. 47. Bandes unserer Zeitschrift sowohl eine Besprechung des 3. Bandes des Werkes von Stolz wie der Arbeiten von Battisti erschienen. Sollte es Ihnen jedoch möglich sein, einen kurzen zusammenfassenden Bericht über die Tiroler Ortsnamen Literatur unter Heraushebung des historisch Wesentlichen und unter Verzicht auf alles philologische Detail zu liefern, so würden wir eine solche Mitteilung gerne bringen.

In auszeichneter Hochachtung  
Ihr ergebener  
Brunner

（共に保管されていた封筒に記載されていた宛先）

Herrn Univ. Professor  
Dr. Ludwig Steinberger  
in  
Innsbruck  
Claudiastr. 18/21

---

<sup>a</sup> MITTEILUNG – WIEN am レターヘッド、便箋に印刷済み

10.

1937年6月23日

オットー・ブルンナーがカール・ブランディにあてた手紙（手稿、1頁）

所蔵：SUB Göttingen, NL Karl Brandi

請求記号：Cod. Ms Karl Brandi 47 Beil 12r.

Universitätsprofessor  
Dr. Otto Brunner  
Wien 13, Hofwiseng. 19<sup>a</sup>

Wien, den 23. Juni 1937

Sehr verehrter Herr Professor!

Sie hatten die Freundlichkeit mir für meine Teilnahme an Erfurter Historikertag Ersatz der Reise- und Aufenthaltskosten zuzusagen. Näheres – so schrieben Sie – werde ich durch Herrn Bittner<sup>69</sup> erfahren. Da Herr Bittner aber

---

<sup>69</sup> ルードヴィヒ・ビットナー(Ludwig Bittner, 1877–1945)、オーストリア出身の歴史家、ウィーン帝国古文書館勤務、1020年代末より同古文書館長を務める。BORODAJKEWYCZ,

keine weitere Nachricht erhielt, so erlaube ich mir anzufragen, ob mir in Erfurt die Aufenthaltskosten in Mark ausbezahlt werden können, so daß ich nicht gezwungen wäre, österr. Geld zu wechseln. Die Mitnahme von österr. Geld ist mit 200 S. limitiert. Da ich nun von Erfurt direkt nach Italien reise, liegt mir daran, den erlaubten Betrag möglichst unangetastet zu lassen. Jedenfalls darf ich um Nachricht bitten, welche Möglichkeiten bestehen, da ich andernfalls mich bemühen müsste, noch rechtzeitig Reisemark oder ausländische Valuten, deren Mitnahme erlaubt ist, zu beschaffen.

Mit deutschem Gruß  
Ihr ergebener  
Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor – Hofwieseng. 19 スタンプ

11.

1937年6月25日

ヴァルター・プラッツホーフ<sup>70</sup>がオットー・ブルンナーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名無し、1頁）

所蔵：SUB Göttingen, NL Karl Brandi

請求記号：Cod. Ms Karl Brandi 47 Beil 12v.

Frankfurt/M., den 25.6.37.

Sehr geehrter Herr Kollege,

Auf Ihr Schreiben vom 23. d. M. erwidere ich Ihnen, dass Herr Geh. Rat Brandi es übernommen hatte, Herrn Bittner in Kenntnis zu setzen. Ich kann Ihnen meine Zusage heute nur bestätigen. Der Betrag wird Ihnen in RM ausgezahlt werden. Da Sie in Erfurt reden, werden Ihnen, wie allen Rednern, die Fahrtkosten 3. Klasse vom Verband bezahlt werden.

Mit deutschen Gruss  
Ihr  
sehr ergebener  
Platzhoff

An  
Herrn Prof. Brunner,  
Wien XIII  
Hofwiesengasse 19.

---

T., Bittner, Ludwig, in: *NDB* 2 (1955), p. 281.

<sup>70</sup> ヴァルター・プラッツホーフ(Walter Platzhoff, 1881–1969)、ドイツ人歴史家、ボン大学やフランクフルト・アム・マイン大学で教鞭をとった。Frost, R., Platzhoff, Walter, in: *Frankfurter Biographie* 2 (1996), pp. 141–142.

12.

1938年4月16日

オットー・ブルンナーがニールス・ディードリッヒスに宛てた手紙（手稿、1頁）

所蔵：TUL Jena, NL Diederichs

請求記号：NL Diederichs Brunner 254r

Universitätsprofessor

Dr. Otto Brunner

Wien, 13., Hofwieseng. 19<sup>a</sup>

Wien, den 16 April 1938

Sehr verehrter Herr Diederichs!

Ich danke Ihnen herzlich für die die[!] schönen Bändchen der Ostmarkschriften und Ihre freundlichen Zeilen. Sie und Herr Ullmann<sup>71</sup> haben damit ein Werk fortgeführt, das für die geistige Heimkehr Osterreichs[!] ins Reich noch seine Früchte tragen wird.

Ich empfinde es als innere Verpflichtung an diesem Werk nach Kräften mitzuarbeiten. Darum werde ich Ihnen Nachricht geben, so bald ich meine Arbeitspläne einigermaßen übersehe.

Mit freundlichen Grüßen und Heil Hitler  
Ihr ergebener  
Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor – Hofwieseng. 19 スタンプ

13.

1938年7月7日

オットー・ブルンナーとオイゲン・ディーデリヒス出版社との間の契約書（タイプライター稿、署名無し、1頁）

所蔵：TUL Jena, NL Diederichs

請求記号：NL-Diederichs Brunner 255r

Li/K

Verlags-Vertrag

Zwischen Herrn Professor Otto Brunner, Wien, einerseits und dem Verlage Eugen Diederichs, Jena andererseits, ist heute nachfolgender Vertrag

---

<sup>71</sup> ヘアマン・ウルマン(Herrmann Ullmann, 1884–1958)、ドイツ人記者。オイゲン・ディーデリヒス出版から Ostmarkschriften という東方研究に関する雑誌を編集・出版した。TRIEBEL, F., *Der Eugen Diederichs Verlag, 1930–1949. Ein Unternehmen zwischen Kultur und Kalkül*, München 2004, p. 175.

abgeschlossen worden:

§1

Herr Professor Brunner übernimmt es, für die Reihe „Ostmark-Schriften“ eine Arbeit über  
im Umfang von drei Bogen zu schreiben und das Manuskript bis Anfang September  
1938 an den Verlag abzuliefern. Er überträgt das alleinige Verlagsrecht an dieser  
Schrift dem Verlag Eugen Diederichs für alle Auflagen und Ausgaben.

§2

Die Höhe der ersten Auflage wird voraussichtlich 3000 Exemplare betragen  
zuzüglich 10% für honorarfreie Autoren-, Besprechungs-, Partie- und  
Verlustexemplare. Der Verfasser erhält bei Erscheinen 30 Freiexemplare.

§3

Das Honorar beträgt 200.- M für jede Auflage von 3000 Exemplaren. Der Verlag  
ist aber bereit, nach vollendeter Drucklegung dem Autor einen garantierten  
Honorarbetrag von 300.- M zu zahlen, der mithin das Honorar für die 1. Hälfte der  
eventuellen 2. Auflage einschliesst.

§4

Das Manuskript ist im druckfertigen Zustand abzuliefern. Die Korrekturen im Satz  
sind auf ein Mindestmaß zu beschränken. Überschreiten die Korrekturen 10% der  
Satzkosten, so behält sich der Verlag für diesen Betrag eine Anrechnung auf das  
Honorar vor.

§5

Bei Vergebung des Abdruckes oder Übersetzungsrechtes werden die erzielten  
Honorare zwischen Verfasser und Verlag je zur Hälfte geteilt.

Der vorliegende Vertrag, der auch für die Rechtsnachfolger der  
Vertragschliessenden gelten soll, ist in zwei gleichlautenden Exemplaren  
ausgefertigt und von beiden Teilen zur Bekundung ihres Einverständnisses  
unterschrieben worden.

Wien den

Jena, den 7. Juli 1938  
EUGEN

DIEDERICH'S VERLAG

14.

1939年1月9日

オットー・ブルンナーがディーデリッヒスに宛てた手紙（タイプライタ  
ー稿、署名有り、1頁）

所蔵：TUL Jena, NL Diederichs

請求記号：NL Diederichs Brunner 2207r

Herrn Dr. Diederichs.

Wien, am 9. Jänner 1939.

Sehr verehrter Herr Doktor,

Ich danke Ihnen herzlichst, durch eine vorübergehende Abwesenheit von

Wien etws[!] verspätet, für die Zusendung der Bücher, insbesondere für die höchst interessanten und wertvollen Erinnerungen des Generals Bardolff<sup>72</sup>. Ich habe dieser Tage den letzten Teil meines Buches „Land und Herrschaft“ in Druck gegeben. Da 4/5 schon gesetzt ud[!] zum grössten Teil korrigiert sind, hoffe ich in einigen Wochen diese ganze Arbeit, die mich lange Jahre beschäftigt hat, endlich erledigt zu haben. Ich werde schon in den nächsten Wochen das im Sommer von mir entworfene Manuskript vornehmen und hoffe, Ihnen im Frühjahr Mitteilung machen zu können, wann mit dem Abschlusse der Arbeit mit Sicherheit zu rechnen ist. Mit den von Ihnen vorgeschlagenen Bedingungen wäre ich sehr einverstanden. Ich werde jedenfalls alles daransetzen, die Arbeit vor Beginn der grossen Ferien zu Ende zubringen; bleibt die grosse Unbekannte der militärischen Uebung, die ich in diesem Jahre jedenfalls abzudienen haben werde.

Mit den besten Empfehlungen und  
Heil Hitler!

Ihr ergebener

Otto Brunner<sup>a</sup>

---

<sup>a</sup> Otto Brunner 手書き

## 15.

1941 年 2 月 20 日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインベルに宛てた手紙(手稿、2 頁)

所蔵 : SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号 : Cod Ms H Heimpel E 1 199-1

Universitätsprofessor

Dr. Otto Brunner

Wien 89, Veitingergasse Nr. 6

A 56-9-81<sup>a</sup>

Wien, den 20. Februar 1941

Sehr geehrter Herr Kollege!

Leider ist mir bisher nicht gelungen, über den Stand meiner Ordinariatssache mehr Klarheit zu erhalten als vor einer Woche. Ich darf Ihnen also nochmals meinen Standpunkt darlegen: So ehrenvoll ein Ruf nach Leipzig für mich wäre, so fühle ich mich doch verpflichtet, in Wien zu bleiben, wenn ich in

---

<sup>72</sup> カール・バルドルフ(Carl Bardolff, 1865–1953)、オーストリア出身、グラーツ大学で法学を学んだあと、1889 年に職業軍人となる。第 1 次世界大戦後は軍隊から離れ法律家として従事、1938 年にナチ党によるオーストリア併合後はナチ突撃隊の隊長を務めた。1945 年以降は出版禁止命令を受けた。なお、ブルンナーの書簡で記されているバルドルフの *Erinnerungen* とは彼の著書 *Soldat im alten Österreich. Erinnerungen aus meinem Leben*, Jena 1938 を指している。Austria Form AEIOU, Bardolff, Carl Freiherr von ([https://austria-forum.org/af/AEIOU/Bardolff,\\_Carl\\_Freiherr\\_von](https://austria-forum.org/af/AEIOU/Bardolff,_Carl_Freiherr_von), last access 2022.11.27).

absehbarer Zeit zum Vorstand meines Instituts ernannt werde. Ich weiß, daß mein Weggang von Wien zu sehr großen Schwierigkeiten führen, die geplante Anerkennung als Archivschule in Frage stellen und die augenblicklich lebenswichtigen Beziehungen zum // Reichsarchiv Wien sehr erschweren würde. Es ist in sehr mühsamen Verhandlungen gelungen, einen Ausgleich zwischen der Tradition des Instituts und den neuen Anforderungen an den wissenschaftlichen Archivar zu finden. Als ich nun Bittner andeutete, daß ich unter Umständen Wien verlassen würde, ließ er erkennen, daß er dann eine Lösung wie in Dahlem vorsehen würde.

Unter diesem[!] Umständen kann ich Wien nicht verlassen und daher auch nicht nach Leipzig gehen, so sehr mich der Gedanke, einmal in eine andere Hochschulstadt zu kommen reizen würde. Sollte ich in absehbarer Zeit von einer Veränderung dieser Situation Kenntnis erhalten, würde ich Ihnen sofort Nachricht geben. Aber dann ist es wohl zu spät.

Mit nochmaligem herzlichem Dank für die freundliche Aufnahme in Leipzig und Empfehlungen an Ihre Frau Gemahlin

bin ich mit Heil Hitler  
Ihr sehr ergebener  
Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor — A 56-9-81 スタンプ

## 16.

1941 年 4 月 20 日

オットー・ブルンナーが（おそらく）ヴァルター・フランク<sup>73</sup>に宛てた手紙（タイプライター稿、署名無し、1 頁）

所蔵：UB Johann Christian Senckenberg

請求記号：NSq 281 Brief Nr.2

Dr. Panzer<sup>a74</sup>  
Zur Kenntnisnahme<sup>b</sup>

---

<sup>73</sup> ヴァルター・フランク(Walter Frank, 1905–45)、ドイツ人歴史家、反ユダヤ主義者、1935 年に新設された「新生ドイツ史帝国研究所」(Reichsinstitut für Geschichte des neuen Deutschlands)所長。ナチのプロパガンダに歴史学者として大いに加担した。1945 年 5 月 9 日ドイツ敗戦直後に自殺。BERG, M., Walter Frank, in: FAHLBUSCH, M. et al. (ed.), *Handbuch der völkischen Wissenschaften. Akteure, Netzwerke, Forschungsprogramme. 2. Aufl.*, Berlin/Boston 2017, pp. 173–179; KLEE, pp. 160–161; ペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』259 頁。

<sup>74</sup> フリードリヒ・パンツァー(Friedrich Panzer, 1870–1956)、ドイツ出身のドイツ語学者、文学史学者、フライブルク大学、フランクフルト・アム・マイン大学、ハイデルベルク大学で教鞭をとる。KIENING, Chr., Panzer, Friedrich, in: *NDB* 20 (2001), p. 40.

Abschrift.

Wien, den 30. April 1941

Sehr verehrter Herr Frank!

Empfangen Sie meinen herzlichsten Dank für Ihre Sendungen, vor allem für die beiden Bände „Reich und Reichsfeinde“<sup>75</sup>. Mein besonderes Interesse hat naturgemäss Ganzers Beitrag über das „Reich als europäische Ordnungsmacht“. Ich habe mich gefreut, z.B. über des Prinzen Eugen Anschauungen zu finden, die sich mit eigenen Formulierungen in einem eben fertiggestellten Aufsatz über die Habsburgermonarchie und Südosteuropa völlig decken.  
Mit den besten Grüssen und

Heil Hitler  
Ihr sehr ergebener  
gez. Otto Brunner.

---

<sup>a</sup> Dr. Panzer 手書き

<sup>b</sup> Zur Kenntnisnahme スタンプ

**17.**

1941 年 10 月 7 日

オットー・ブルンナーがエミル・マイネンに宛てた手紙 (手稿、1 頁)

所蔵：IfL Leipzig, NL Emil Meynen

請求記号：Nachlass Emil Meynen 761-1/33

Wien, den 7. Oktober

Lieber Herr Meynen!

Meine herzlichsten Glückwünsch zu Ihrer Jüngsten. Hoffentlich erheben Sie an Ihr ebensoviel Freude wie an Ihren älteren Kindern.

Mit den besten Grüßen u. Heil Hitler  
Ihr  
Otto Brunner

(Wien 1, 07.10.41.の消印付き封筒も共に保存、封筒宛先)

Hausdozenten  
Dr. Emil Meynen  
Berlin NW 87  
Altonaerstr. 32

**18.**

1942 年 3 月 23 日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインペルに宛てた手紙 (手稿、1 頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

---

<sup>75</sup> FRANK, Walter, *Reich und Reichsfeinde*, Bd. 1 und 2, Hamburg 1941.

請求記号 : Cod Ms H Heimpel E 1 199-2

Universitätsprofessor  
Dr. Otto Brunner  
Wien 89, Veitlingergasse Nr. 6  
A 56-9-81<sup>a</sup>

Wien, den 23. März 1942

Sehr verehrter Herr Kollege!

Ich danke Ihnen bestens für die Zusendung der wertvollen Arbeit von Eberhard Otto. Daß Sie selbst diese Arbeit versandten, hängt wohl damit zusammen, daß Otto im Felde steht. Ich will doch hoffen, daß er sich wohl befindet. Als ich vor einiger Zeit von einer nordwestdeutschen Universität über verschiedene Kollegen befragt wurde, war auch Ottos Name auf der Liste. Ich nahm die Gelegenheit wahr energisch auf ihn hinzuweisen.

Mit dem besten Grüßen und Empfehlung an Ihre Frau Gemahlin

bin ich Ihr sehr ergebener  
Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor — A 56-9-81 スタンプ

19.

1942年5月25日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインペルに宛てた手紙(手稿、2頁)

所蔵 : SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号 : Cod. Ms H Heimpel E 1 199- 3

Langenlebar, 25. V. 42

Universitätsprofessor  
Dr. Otto Brunner  
Wien 89, Veitlingergasse Nr. 6  
A 56-9-81<sup>a</sup>  
dzt. Leutnant  
Luftkriegsschule 7  
Tulln-Langenlebar  
(Niederdonau)

Sehr verehrter Herr Heimpel!

Ich bin gerne bereit, das Gutachten über Otto zu erstellen. Ich habe schon vor einiger Zeit auf Anfragen aus Münster auf ihn hingewiesen. Als ich vor kurzem eine Anfrage aus Jena erhielt, die bereits eine Liste von im Betracht gezogenen Herren enthielt, darunter auch Otto, habe neuerlich auf ihn aufmerksam gemacht. Ich bin durchaus Ihrer Ansicht, daß Otto für eine Professur reif ist und daß Leute, die den Mut haben, schwierige Fragen aufzugreifen, jedenfalls mehr versprechen als korrekte Mittelmäßigkeiten.

Ich habe augenblicklich ziemliche Sorgen um das Institut für Geschichtsforschung. Während ich seit Ostern wieder eingezogen bin – allerdings

nicht weit von Wien, wo ich Fahnenjunker der Luftwaffe in Geschichte etc. unterrichte –, hat sich Kollege Zatschek<sup>76</sup> entschlossen, nach Prag zurückzukehren. Die Schwierigkeit, in Wien eine Wohnung zu erhalten und lockende Angebote aus Prag scheinen ihm dazu bestimmt zu haben. // Es handelt sich um das Ordinariat, das Hans Hirsch<sup>77</sup> innehatte und das Mittelalter und Hilfswissenschaften vereinigt. Nun ist der Kurs des hier in Betracht kommenden Kollegen recht klein. Bisher bestand ja der Wunsch, gerade diese Professur mit einem aus unserem Institut selbst hervorgegangenen Kollegen zur besetzen. Heute ist aber niemand mehr oder noch nicht vorhanden. Bei Santifaller<sup>78</sup> scheint mir doch die Gefahr vorzuliegen, daß unsere Tradition völlig steril wird. Die zahlreichen Schreiber von H. Hirsch sind entweder noch nicht soweit oder sie halten nicht, was sie versprochen. Die starke Lehrerpersönlichkeit von Hirsch wußten eben Leute über ihr Maß hinauszuhoben.

Ich denke nun an Klewitz<sup>79</sup>, der mir heute am fruchtbarsten die Verbindung von Mittelalter-Hilfswissenschaften zu vertreten scheint. Ich wäre Ihnen sehr verbunden, wenn Sie mir Ihren Rat in dieser Sache schenken wollten. Ich bitte Sie nun, die Angelegenheit einstweilen als vertraulich zu behandeln.

Mit den besten Grüßen u.  
Heil Hitler  
Ihr  
Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor — A 56-9-81 スタンプ

---

<sup>76</sup> ハインツ・ツァチェック(Heinz Zatschek, 1901–65)、オーストリア出身の歴史家、1929年以降ブラハのドイツ＝カール大学で、1941年以降はウィーン大学でも教える。HRUZA, H., Heinz Zatschek (1901–1965), in: HAAR, I. et al. (ed.), *Handbuch der völkischen Wissenschaften. Personen – Institutionen – Forschungsprogramme – Stiftungen*, München 2008, pp. 783–786. KLEE, p. 691.

<sup>77</sup> ハンス・ヒルシュ(Hans Hirsch, 1878–1940)、オーストリア出身の歴史家、オーストリア歴史研究所やウィーン大学におけるブルンナーの師でもある。ZATSCHEK, H., Hirsch, Hans, in: *NDB* 9 (1972), pp. 214–215; KLEE, p. 258.

<sup>78</sup> レオ・サンティファッラー(Leo Santifaller, 1890–1974)、オーストリア出身の歴史家、ウィーンで数学と物理を学んだあと、最終的に歴史学でを学び、南チロルのボルツァーノ古文書館、ミュンヘンのモスマンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ協会での文書編纂プロジェクトに従事する。その後、プレスラウ大学、ウィーン大学で教える。MALECZEK, W., Leo Santifaller (1890–1974), der Erforscher der mittelalterlichen Papsturkunde, und der italienische Kronprinz Umberto im Jahr 1924, in: ALRAUM, C. et al. (ed.), *Zwischen Rom und Santiago. Festschrift für Klaus Herbers zum 65. Geburtstag*, Bochum 2016, pp. 397–418

<sup>79</sup> ハンス＝ヴァルター・クレヴィッツ(Hans-Walter Klewitz, 1907–43)、ドイツ出身の中世史学者、1936年ゲッティンゲン大学教員になり、1937年ナチ党入党、1940年以降フライブルク大学教授。1943年3月に第1SS装甲師団ライプシュタンダルト・SS・アドルフ・ヒトラーに招聘されるが2週間後に急死した。KRÜGER, S., Klewitz, Hans-Walter, in: *NDB* 12 (1980), pp. 59–60.

20.

1942 年 11 月 7 日

オットー・ブルンナーが外務省に宛てた手紙 (手稿、1 頁)

所蔵：IfL Leipzig, NL Emil Meynen

請求記号：Nachlass Emil Meynen 856-2/63

Universitätsprofessor

Dr. Otto Brunner

Wien 89, Veitingergasse Nr. 6

A 50-9-81<sup>a</sup>

Langenlebar, 7.11.1942

dzt. Leutnant

Luftkriegsschule 7 (Tulln)

Langenlebar (Nd.)

Sehr verehrter Herr Unterstaatssekretär!<sup>80</sup>

Ihre freundliche Aufforderung vom 3. VII. 42, an dem geplanten „Historisch-geograph. Atlas von Europa“ mitzuarbeiten, hatte ich sogleich durch Herrn Dr. Meynen zustimmend beantwortet. Ich darf diese Zustimmung hiermit nochmals wiederholen.

An der am 18. d. M. stattfindenden Sitzung werde ich nicht teilnehmen können, da ich im Wehrdienst stehe.

Heil Hitler

Ihr sehr ergebener

Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Universitätsprofessor — A 56-9-81 スタンプ

21.

1950 年 1 月 19 日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインベルに宛てた手紙 (手稿、1 頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Mas H Heimpel E1 199-4

Brunner, Wien XIII

Veitingerg. 6

---

<sup>80</sup> この手紙の宛先である外務省の Unterstaatssekretär は 1940 年から 1943 年まで外務省で特にユダヤ人問題や隣国へのドイツ侵攻とユダヤ人追放などを扱う DIII 部門のトップを務めていたマルティン・ルター (Martin Luther, 1895–1945) であると思われる。DÖSCHER, H.-J., Martin Luther – Aufstieg und Fall eines Unterstaatssekretärs, in: SMELSER, R. et al. (ed.), *Die braune Elite II.*, Darmstadt 1993, pp. 179–192.

Wien, den 19. Jänner 1950

Lieber Herr Kollege!

Das Buch, dessen ich mich nicht genau entsinnen konnte, heißt: Clair Hayden Bell and Erwin G. Gudde, *The Poems of Lupold Hornburg*. University of California Publication in Modern Philology, VI, 27, n. 4, S. 149-300. Berkeley and Los Angeles 1945. Hier sind als Anhang S. 266 ff. Lupold von Bebenburgs „Ritmaticum“ u. Otto Baldemans „Von dem remschen richen eyn clage“ gedruckt, da sie die Vorlagen für Hornburgs „Dyse rede ist von des Ryches clage“ darstellten. Ich habe das Exemplar aus der Bibliothek unserer Akademie der Wissenschaften vor mir, das gewiß nach Göttingen entlehnt werden könnte, wenn das Werk wider Erwarten in Westdeutschland nicht vorhanden wäre.

Ich bin erst gestern heimgekehrt, da ich mich noch in Frankfurt und Linz aufhielt und beginne nun langsam den reichen Ertrag meiner Reise zu verarbeiten. Ich möchte Ihnen aber nochmals ganz besonders herzlich für die freundliche Aufnahme u. die soeben Anregungen danken.

Mit besten Grüßen u. Empfehlungen Ihr  
Otto Brunner

22.

1950 年 4 月 10 日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインベルに宛てた手紙(手稿、2頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Ms H Heimpel E 1 199-5

Wien XIII, den 10. April 1950  
Veitingergasse 6

Lieber Herr Kollege!

Herzlichsten Dank für Ihre mir von Herrn Ipsen<sup>81</sup> übermittelte Alexander von Roes-Edition<sup>82</sup>. Ich habe mich ganz besonders darüber gefreut, da ich die Prerogativen zweimal in Seminarübungen behandelt habe. Nicht minder danke ich Ihnen für Ihr Studie über Karl d. Kühnen. Haben Sie eine größere[!] Arbeit über Burgund in Vorbereitung? Ich wäre für eine Mitteilung sehr dankbar, da ich ich[!] daran denke, ein seit langem gesammeltes Material über das „Haus Österreich“ u. seine Monarchie zu einem Buch zu gestalten. Da sind mir die Arbeiten über Burgund natürlich sehr wichtig. Darf ich Sie gleich noch um eine

---

<sup>81</sup> ギュンター・イプセン(Gunther Ipsen, 1899–1984)、オーストリア出身の社会学者、哲学者。1920年代以降独特のドイツ民族中心的でフェルキッシュ(völkisch)な政策を学術的に推し進める「東方研究」の中でも社会学的分野で活躍した。HAMANN, D., Gunther Ipsen und die völkische Realsoziologie, in: FAHLBUSCH, M. (ed.), *Völkische Wissenschaften und Politikberatung im 20. Jahrhundert. Expertise und Neuordnung Europas*, München 2010, pp. 177–198; ペーター・シェットラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』266頁。

<sup>82</sup> GRUNDMANN, Herbert / HEIMPEL, Hermann (ed.), *Die Schriften des Alexander von Roes* (MGH Deutsches Mittelalter 4), Weimar 1949.

andere Auskunft bitten. Ich habe kürzlich versucht, das immense Material in Bastians Ausgabe des Runtingerbuchs<sup>83</sup> für die Wiener Handelsgeschichte auszuwerten. Nun entnehme ich Ihrem Nachruf in der H.Z., daß Bastians Papiere einem Bombenangriff zum Opfer gefallen sind. War darunter auch seine „Geschichte des süddeutschen Handels mit Ungarn“. Aus seinen Andeutungen im Runtingerbuch geht deutlich hervor, daß diese Arbeit für die Wirtschaftsgeschichte Wiens von immenser Bedeutung gewesen wäre.

Da jetzt endlich der Drucksachenverkehr von Österreich nach den Westzonen freigegeben wurde, hoffe ich Ihnen bald einige kleinen Studien, die einen Druck sind, zusenden zu können. // Über mein persönliches Geschick haben Sie wohl vom Herrn Schramm<sup>84</sup> gehört. Wenn ich auch akademisch nicht tätig sein kann, so habe ich mein Hab u. Gut, d. h. vor allen meine Bücher gerettet und habe im Rahmen der Wiener Akademie der Wissenschaften Möglichkeit zur Betätigung.

Ich bitte Sie, mich Ihre Frau Gemahlin zu empfehlen und bin mit den besten Grüßen

Ihr sehr ergebener  
Otto Brunner

23.

1950年4月20日

フリードリヒ・パンツァーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名無し、2頁）

所蔵：UB Heidelberg

請求記号：Hs. 3824 G1.20 Heidelberg, 20.04.1950. - 1 Br.-Dg., Deutsch. - Brief

Heidelberg, am 20.4.50  
Neuenheimer Ldstr. 12

Hochverehrter Herr Kollege!

Sie müssen mir wohl ernstlich zürnen, daß ich Sie so lange ohne Dank und Echo ließ auf Ihren liebenswürdigen Brief und die so gütige Zusendung des Buchaufsatzes. Ich bitte, das zu verzeihn[!]; ich bin längere Zeit krank gewesen

<sup>83</sup> BASTIAN, Franz., *Das Runtingerbuch 1383-1407 und verwandtes Material zum Regensburger-südostdeutschen Handel und Münzwesen. 3: Urkunden, Briefe, Rechnungsauszüge, Register mit Text des Runtingerbuches, Berichtigungen, Ergänzungen* (Deutsche Handelsakten des Mittelalters und der Neuzeit, 8), Regensburg 1943; DERS., *Das Runtingerbuch 1383-1407 und verwandtes Material zum Regensburger-südostdeutschen Handel und Münzwesen. 1: Darstellung* (Deutsche Handelsakten des Mittelalters und der Neuzeit, 6), Regensburg 1944.

<sup>84</sup> ペアシー＝エルンスト・シュラム(Percy Ernst Schramm, 1894-1970)、ドイツ出身の歴史家、第2次世界大戦中のナチ的な活動が原因で1945年直後3年間の公職追放の罰を受けたが、それ以外の時期は1929年から1963年までゲッティンゲン大学で歴史を教えた。SCHALLER, H. M., Schramm, Percy Ernst, in: *NDB* 23 (2007), pp. 515-517.

und mußte vieles, das dringend gewesen wäre, peinlich liegen lassen. Einigermäßen wieder erholt, soll es eines meiner ersten Geschäfte sein, Ihnen für Ihre Güte herzlichst zu danken.

Seit einem Jahrzehnt mit der Herstellung eines ausführlichen Kommentars zum Nibelungenliede beschäftigt, hatte ich Ursache, der Geschichte des Donautals zwischen Passau (wohin ich die Entstehung des Liedes setze) und der ungarischen Grenze genauer nachzugehen, um das Mögliche zur Erklärung des Liedtextes herauszuholen. Mein 1. Band soll eine „Einführung in die Dichtung und ihre Probleme“ bringen. Er hat auch einen Abschnitt „Land und Leute im Liede“; hier mußte natürlich auch die geschichtliche Herkunft der Rüdiger-Figur<sup>85</sup> erörtert werden und dafür war Muchs Aufsatz einzusehen, des[!] ich nicht hatte erhalten können. Ich sah nun freilich, daß ich mir seine Ergebnisse nicht anzueignen vermochte; ich glaube doch, daß Rüdiger[!] wirklich ein geschichtlicher Graf der Ostmark gewesen ist. Da Sie sich aber so gütig erbieten, mir auch weiter zu helfen, so erlaube ich mir, Ihnen einen Durchschlag dessen zu senden, was ich darüber geschrieben habe, mit der Bitte, von meiner Darlegung freundlich Kenntnis zu nehmen und mir gelegentlich zu sagen, ob ich nach Ihrer Meinung, die auf mehr Erfahrung und Sachkunde inbezug auf den Wert eines Totenregisters sich gründet, als sie mir zur Verfügung steht, meine Auffassung berechtigt heißen darf. Die Rolle, die R. im Liede spielt, wird in meinem Buche anderweit ausführlich erörtert; im Idyll von Bechelaren spielt er die Rolle, die der Ungarnkönig 1189 gegenüber Barbarossa bei dessen Einkehr auf dem Kreuzzug gespielt hat, sein Tod nach schwerem seelischem Konflikte ist aufs Stärkste durch das altfranzösische Epos von den Haimonskindern<sup>86</sup> beeinflusst.

Ich rücke nun noch mit zwei weiteren Anliegen an. Ich wäre Ihnen überaus dankbar, wenn Sie mir freundlich sagen möchten, wo ich mich über die Mark Pütten zuverlässig unterrichten könnte; sie ist mir um der „Klage“ willen wichtig. Ich kenne die Ausführungen von Felicetti v. Liebenfels<sup>87</sup> in den Beitr. z. Steiermärk. Geschichtsquellen Bd. IX und X, 1872/3<sup>88</sup> und von Lampel Bll. Ver. f. Ldend. v. NOest., NF. XXII, 1888<sup>89</sup>; letztere erscheinen mir [...]a // Die Mark war ja wohl durch den steirischen Erbvertrag 1192 an Oesterreich gefallen. Ich wüßte gern etwas Näheres über die und ihre Rolle in der Zeit um die Jahrhundertwende.

---

<sup>85</sup> Rüdiger von Bechelaren はニーベルンゲン伝説の登場人物。

<sup>86</sup> Haimonskinder はカロリング期の英雄伝説に登場する 4 人の子供たち。

<sup>87</sup> モーリッツ・レオポルド・フェリッツェッティ・フォン・リーベンフェルス(Moritz Leopold Felicetti, Edler von Liebenfels, 1816–1889)、オーストリア人歴史家・詩人。FERK, F., Moritz Felicetti von Liebenfels, in: *Mitteilung des Historischen Vereins für Steiermark* 49 (1902), pp. 310–328; KRONES, F. v., Felicetti von Liebenfels, Moritz, in: *Allgemeine Deutsche Biographie* 48 (1904), pp. 514–515.

<sup>88</sup> LIEBENFELSS, Moritz Felicetti von, Steiermark im Zeitraum vom achten bis zwölften Jahrhundert. Historisch-topographische Skizze auf Grundlage kritischer Quellenstudien, 1. Abteilung, in: *Beiträge zur Kunde steiermärkischer Geschichtsquellen* 9 (1872); 2. Abteilung, in: *Beiträge zur Kunde steiermärkischer Geschichtsquellen* 10 (1873).

<sup>89</sup> LAMPEL, Josef, Über die Mark Pitten, in: *Blätter des Vereins für Landeskunde von Niederösterreich. Ser. NF* 22 (1888), pp. 133–187.

Beschwerden macht mir weiter das Auftauchen einer Burg Helches in Treisenmure Str. 1332 des Liedes. Ich wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie sich die Mühe machen wollten, auf den größeren Durchschlagsblättern die ich beilege, einmal anzusehen was ich darüber geschrieben habe und mir freundlichst Ihre ungeschminkteste Kritik dazu auszusprechen. Es ist mir peinlich im Wege, daß mir die lebendige Anschauung gerade für diesen Fall fehlt; ich habe mich wohl in Linz, Melk, St. Pölten aufgehalten, sonst aber bin ich immer nur durchgefahren.

Nach der freundlichen Mitteilung Ihres Briefes liegt also das Schloß in Pöchlarn nicht unmittelbar am Donauufer; aus der österr. Kunsttopographie hatte ich das nicht entnehmen können. Das widerspricht der Angabe in Str. 1320 des Liedes. In dem heutigen Schlosse dauert doch wohl das alte fort und nach Ihrer Zeichnung ist ja wohl eine so weitgehende Verlagerung der Donau nicht anzunehmen. Pöchlarn war ja alter Regensburger Besitz; möglich, daß der Passauer Dichter dort nicht[!] so gut orientiert war wie an den übrigen von ihm genannten Orten.

Ich erlaube mir Ihnen als bescheidensten Ausdruck meines Dankens mein Walthariusbüchlein beizulegen. Freilich möchte eine Gabe eher ärgerlich sein für einen Historiker, wenn sie versucht, eine Erzählung die geschichtlich sein will, völlig ins Reich der Fantasie zu verweisen.

Mit einer Rücksendung der beigelegten geschriebenen Blätter bitte ich Sie sich nicht zu bemühen[!]; es sind völlig entbehrliche Durchschläge, die Sie nach gültiger Kenntnisnahme mit Beruhigung dem Papierkorb übergeben dürfen.

Mit den verbindlichsten Grüßen bin ich

Ihr dankbar ergebener

---

<sup>a</sup> 便箋切断のため読解不可能。

## 24.

1950年5月11日

オットー・ブルンナーがフリードリヒ・パンツァーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、2頁）

所蔵：UB Heidelberg

請求記号：Hs. 3824 G2. 60, 1

Brunner, Wien XIII,  
Veitingergasse 6

Wien, den 11. Mai 1950

Sehr verehrter Herr Geheimrat!

Anbei erlaube ich einen Plam[!] von Pöchlarn zu senden, den Dr. ing. A. Klaar<sup>90</sup> vom Bundesdenkmalamt zur Verfügung gestellt hat. Nach seiner

---

<sup>90</sup> アーダルベルト・クラール(Adalbert Klaar, 1900–81)、オーストリア人建築家、技術者、研究者。Austria Form AEIOU, Klaar, Adalbert ([https://austria-forum.org/af/AEIOU/Klaar%2C\\_Adalbert](https://austria-forum.org/af/AEIOU/Klaar%2C_Adalbert), last access 2022.11.27).

Mitteilung ist kein Zweifel, daß das Schloß immer an derselben Stelle, in der Südostecke des ehemaligen römischen Alenlagers umlag. Ältere Bauteile, die in dem jüngeren Umbau erhalten sind, erweisen das. Die mittelalterliche Stadt ist in das castrum hineingebaut, soweit es nicht, ebenso wie in Wien vom Strom weggerissen wurde. Leider hat der Plan keinen Maßstab, aber aus meiner Kenntnis des Ortes kann ich sagen, daß die Entfernung zur Donau recht gering ist und daß man, wenn man vom Palas gegen den Strom blickte, über die niedrigen Häuser hinweg, wenn dieser Teil überhaupt verbaut war, doch wohl den Eindruck haben konnte, daß die Donau vorbeifloß. Allerdings unmittelbar[!] am Strom selbst lag die Burg nicht.

Zu Zeisselmauer erlaube ich mir zu bemerken, daß es kein ganz unbedeutender Ort ist. Es liegt ebenfalls innerhalb eines römischen Alenlagers, das jetzt mit dem in der Vita Severini<sup>91</sup> genannten[!] Asturis identifiziert wird. Im Mittelalter war es der Hauptort der großen das westliche Tullner Feld füllenden passauischen Herrschaft, deren Verwaltungszentrum später nach dem etwas südlich am Rand des Wiener Waldes gelegenen Königsstetten verlegt wurde. Dies erklärt auch, daß sich die Bischöfe von Passau öfters in Zeisselmauer nachweisen lassen, dort erhielt ja auch Walter von der Vogelweide seinen Pelz von Bischof Wolfger. Wenn ich mich recht erinnere, nennt auch Neidhart von Reuental<sup>92</sup> den Ort.

Sonst hätte ich zu den mir freundlichst übersandten Teilen Igres Manuskripts nichts zu bemerken. Auch hier neigt die landesgeschichtliche Forschung dazu, Rüdiger als historische Persönlichkeit zu nehmen. Ich will darüber noch Karl Oettinger<sup>93</sup> fragen und Ihnen dann kurz Nachricht geben.

Über die Mark Pütten ist am besten das Buch von Anton Mell, Grundriß der Verfassungs- und Verwaltungsgeschichte des Landes Steiermark, Graz 1929 heranzuziehen, das auch die einschlägige Literatur angibt.

Ganz besonders danke ich Ihnen, sehr verehrter Herr Geheimrat // für die schöne Schrift über den Waltharius. Ich glaube, auch für uns Historiker ist die Klärung der literaturgeschichtlichen Stellung eines solchen Werkes doch viel aufschlußreicher als der meist ja nur hypotheische[!] und recht recht[!] undurchsichtige Hintergrund tatsächlicher Geschehnisse, der darin eventuell nachklingt.

Mit den Ausdrücken meiner besonderen Wertschätzung  
Ihr sehr ergebener

---

<sup>91</sup> Vita Severini はノリクムの聖セヴェリヌス(St. Severin of Noricum, ca. 410–82)についての聖人伝。聖人伝の伝記はオイギッピウス(Eugippius, ca. 465–ca. 533)。同作品はローマ帝国支配下のオーストリアとバイエルンについての唯一伝来する歴史叙述作品である

<sup>92</sup> Neidhart von Reuental は 13 世紀前半のドイツ語詩人。

<sup>93</sup> カール・オットェンガー(Karl Oettinger, 1906–79)、オーストリア出身の芸術史学者、1942 年以降ウィーン大学で教える、戦後、公職追放の処罰を受け教壇から降り、1954 年以降ドイツのエアランゲン大学で教えた。HOFMANN, W. J., Nachruf auf Karl Oettinger, in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte* 43 (1980), pp. 222–224.

---

<sup>a</sup> Otto Brunner 手書き

25.

1950年5月2日

ヘアマン・ハインペルがオットー・ブルンナーに宛てた手紙の複写（タイプライター稿、署名無し、1頁）

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Ms H Heimpel E 1 199-6

Prof. Dr. Hermann Heimpel

Göttingen

Hainholzweg 34

Göttingen, den 2. 5. 50

Lieber Herr Kollege Brunner!

Leider kann ich nicht glauben, daß aus dem Nachlass von Franz Bastian noch etwas erhalten ist. Eine Ausnahme davon bildet wohl nur das für die Monumenta Boica angefertigte Manuskript des 2. Bandes des Regensburger Urkundenbuches. Dieses müsste sich bei der Kommission für Bayerische Landesgeschichte befinden. Eine ganz leise Hoffnung besteht auch, daß an derselben Stelle oder aber bei der Münchener Historischen Kommission die Sammlungen über die Nördlinger Messen liegen. Wenn überhaupt etwas da ist, so wird Ihnen der Sekretär der Bayerischen Kommission, Herr Kollege Spindler (München 27, Keplerstr. 1) Auskunft geben können. Vielleicht weiss auch noch etwas Bastians Tochter, Frau Elisabeth Arenz, Bonn, Scharnhorststr. 20.

Was meine Arbeiten über Burgund betrifft, so arbeite ich an einer Biographie Karls des Kühnen. Da ich bisher freilich noch keine Gelegenheit hatte, die ausländischen Archive zu besuchen, habe ich bisher nur in gemässigtem Tempo und nur mit den deutschen Akten arbeiten können, hoffe das aber bald zu ändern. Ich habe Einiges veröffentlicht, was Ihnen vielleicht nicht zugänglich war und das ich Ihnen, da ich keine Exemplare mehr habe, auf Abruf, gerne leihen will. Auf Ihre „Geschichte des Hauses Österreich“ bin ich natürlich sehr gespannt.

Ich habe mich sehr gefreut, von Ihrem persönlichen Leben etwas zu hören und würde mich ebenso freuen, wenn die Verbindung nicht ganz abreißen wollte.

Mit herzlichen Grüßen, auch von meiner Frau bin ich

Ihr sehr ergebener

26.

1950年7月18日

オットー・ブルンナーがフリードリヒ・バンツァーに宛てた葉書（手稿、2頁）

所蔵：UB Heidelberg

請求記号：Hs. 3824 G 2. 60, 2

Brunner  
Wien XIII  
Veritingerg. 6

Herrn Geheimrat  
Prof. Dr. Friedr. Panzer  
Westdeutschland Heidelberg  
Neuenheimer Landstr. 12//

Wien, 18. Juli 1950

Sehr geehrter Herr Geheimrat!

Zu dem übersandten Plan von Pöchlarn darf ich nachträglich bemerken, daß sein Maßstab (der der österr. Katastralmappe) 1:2880 beträgt. Daraus lässt sich die Entfernung des Schloßes von der Donau berechnen.

Auch mein Kollege Karl Oettinger, der sich besonders eingehend mit der Frühzeit Niederösterreichs beschäftigt hat, hielt Rüdiger für eine histor. Persönlichkeit.

In ausgezeichnete Hochachtung.  
Ihr sehr ergebener

Otto Brunner

27.

1953年3月17日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインペルに宛てた葉書(手稿、2頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Ms H Heimpel E 1 199-7

Brunner  
Wien XIII  
Veitingerg. 6

Herrn Professor  
Dr. Hermann Heimpel  
Bad Gastein  
Ev. Hospiz Heleneburg  
Salzburg//

Wien, den 17. III. 1953

Sehr verehrter Herr Kollege! Haben Sie herzlichen Dank für Ihr Separatum, dem ich in jeder Hinsicht zustimme. Es ist mir sehr wertvoll, da mich die darin behandelten Probleme in anderem Zusammenhang ebenfalls beschäftigen. Aus Köln habe ich schon längere Zeit keine Nachricht, bisher war jedenfalls noch keine Entscheidung gefallen. Ich wünsche Ihnen beste Erholung in Gastein u. bin mit besten Grüßen

Ihr sehr ergebener  
Otto Brunner

28.

1959年5月22日

エーリッヒ・ロートハッカーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名無し、1頁）

所蔵：ULB Bonn, NL Erich Rothacker

請求記号：NL Rothacker I. Briefe an Otto Brunner, 1959. -2 Briefdurchschläge ohne Unterschrift, Deutch.- Brief

22.5.59

Sehr geehrter Herr Kollege Brunner!

Eben nach Bonn zurückkehrend finde ich Ihren freundlichen Brief vom 14. Mai vor. Ich nehme gerne an der Tagung teil und danke sehr für die Einladung. Als Thema würde ich am liebsten wählen „Die Sprache der Geisteswissenschaften“. Das schein mir etwas angemessener und eigentlich auch leichter verständlich als die Hinzufügung des Wortes „moderne“ (Geisteswissenschaften). „Sprache und Naturwissenschaften“ empfinde ich, offen gesagt, als einigermäßen undeutsch. Dann schon lieber wie oben von mir vorgeschlagen. Ich bitte aber um Rückäußerung. Vorerst bin ich Gott sei Dank hier und habe Ihren Vortrag schon zur Hälfte fertig. 50 Minuten Redezeit werde ich mir natürlich merken. 60 wäre besser, zumal das Thema unerschöpflich ist. Für die schönen Zusendungen herzlichsten Dank.

Mit freundlichen Grüßen bin ich  
Ihr

29.

1959年5月14日

オットー・ブルンナーがエーリッヒ・ロートハッカーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、1頁）

所蔵：ULB Bonn, NL Erich Rothacker

請求記号：NL Rothacker I. Brief von Otto Brunner an Erich Rothacker, Hamburg, 14.05.1959 - 1 Br., masch., Deutsch.- Brief

JOACHIM JUNGIUS-GESELLSCHAFT DER WISSENSCHAFTEN EV  
HAMBURG<sup>a</sup>

Der Präsident

Hamburg, den 14. Mai 1959

Herrn  
Prof. Dr. Erich Rothacker  
B o n n  
Schumannstr. 41

Sehr geehrter Herr Kollege!

In Anknüpfung an unsere kürzliche Unterhaltung über die für den Herbst in Aussicht genomme Tagung der Joachim Jungius-Gesellschaft kann ich Ihnen heute mitteilen, daß wir diese Tagung unter dem Titel „Sprache und Wissenschaft“<sup>b</sup> auf den 29./30. Oktober 1959 festgelegt haben. Ihre prinzipielle Bereitschaft, einen Vortrag zu übernehmen, haben erklärt:

Prof. Betz, München<sup>a</sup>

Prof. Hartmann, Hamburg

Prof. Schalk, Köln

Prof. Seiler, Hamburg

Prof. Snell, Hamburg

Prof. von Weizsäcker, Hamburg.

Ich wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie auf dieser Tagung einen Vortrag übernehmen würden. Im Rahmen unseres Programms käme entweder ein Vortrag über das allgemeine Thema “Sprache und Wissenschaft” in Betracht – den wir dann entweder an den Beginn oder an das Ende der Tagung stellen könnten – oder aber ein Vortrag aus dem Bereich „Sprache und moderne Geisteswissenschaften”<sup>c</sup>. Herr von Weizsäcker wird über das Thema „Sprache und Naturwissenschaften” sprechen.

Als Redezeit für den einzelnen Vortrag sind etwa 50 Minuten vorgesehen.

Die Gesellschaft pflegt die Reise- und Hotelkosten und ein Honorar von DM 150,— – zu vergüten.

Wir würden uns aufrichtig freuen, wenn Sie einen der genannten Vorträge übernehmen könnten.

Mit verbindlichen Grüßen

Ihr sehr ergebener

Brunner<sup>d</sup>

(Prof. Dr. O. Brunner)

### Anlagen

#### Tagungsvorträge

---

<sup>a</sup> JOACHIM – HAMBURG レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> 下線は手書き

<sup>c</sup> 下線は手書き

<sup>d</sup> Brunner 手書き

---

<sup>94</sup> ヴェルナー・ベッツ(Werner Betz, 1912–80)、ドイツ出身のドイツおよびスキャンジナビア語圏の中世史・語学研究者。1937年にナチ党に入党、1940年から1945年までは軍に従事した。1948年からボン大学で教え、1951年にはストックホルムのドイツ大使館勤務、1959年から1980年まではミュンヘン大学のドイツ言語学教授を務めた。BÜRGER, Chr., Betz, Werner, in: KÖNIG, Chr. (ed.), *Internationales Germanistenlexikon 1800–1950*, 1, Berlin/New York 2003, pp. 169–170.

30.

1959年6月22日

エルヴィン・パノフスキー<sup>95</sup>がブルノ・スネルに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、1頁）<sup>a</sup>

所蔵：BSB München, NL Bruno Snell

請求記号：Nachlass Bruno Snell Ana 490.B.IV. Panofsky Brief von Erwin Panofsky an Otto Brunner, Beil.z.Nr.10

The Institute for advanced study Princeton, New Jersey<sup>b</sup>

June 22, 1959

Dr. Bruno Snell  
Heilwigstr. 3  
Hamburg 20, Germany

My dear Snell:

I did not thank you for your nice note of June 9th because I wanted to wait for the letter of Mr. Brunner which you announced. This letter has now arrived, and I have answered – in German in order to avoid further misunderstandings – according to the enclosed carbon.

So, while I am more and more touched by the kindness of good old Hamburg, it is not in October that we shall meet. But we are all the happier to hear that we may celebrate a reunion in the spring provided that we are still alive by that time. In the affirmative case we count on your (and, if she comes along, Herta's) visit and have set aside a bottle of really decent Burgundy for the occasion.

With my renewed thanks, and all good wishes from both of us to all of you,

Yours as ever,  
Sincerely  
Pan<sup>c</sup>  
Erwin Panofsky

Ep: rs  
Encl.

---

<sup>a</sup> この手紙に後述 31 番（同日付、パノフスキーがブルンナーに宛てた手紙の複写）が同封されていた。

---

<sup>95</sup> エルヴィン・パノフスキー(Erwin Panofsky, 1892–1968)、ドイツ出身、法学、芸術史、歴史、哲学を学び、芸術史の分野でベルリン大学などで教壇に立ち 1927 年同大学教授となる。1933 年にナチ党政権掌握後、ユダヤ系の家系だったため公職追放となり、嘗てから学術的交流のあったニューヨーク大学を頼りアメリカへ渡り、その後、ニュージャージーのプリンストン高等研究所の教授となる。MICHELS, K., Panofsky, Erwin, in: *NDB* 20 (2001), pp. 36–38.

---

<sup>b</sup> The Institute – New Jersey レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>c</sup> Pan 手書き

### 31.

1959年6月22日

エルヴィン・パノフスキーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙の複写  
(タイプライター稿、署名無し、1頁) <sup>a</sup>

所蔵：BSB München, NL Bruno Snell

請求記号：Nachlass Bruno Snell, Ana 490.B.IV. Panofsky Brief von Erwin  
Panofsky an Otto Brunner Beil.z.Nr.10

The Institute for advanced study Princeton, New Jersey<sup>b</sup>

22. Juni 1959

Herrn Prof. Dr. Otto Brunner  
Präsidenten der Joachim Jungius-Gesellschaft  
Hamburg, Germany

Sehr verehrter Herr Kollege:

Nehmen Sie meinen verbindlichsten Dank für Ihr freundliches Schreiben vom 16. Juni – ein Schreiben, das mich zwar mit herzlicher Genugtuung aber auch mit einer gewissen Verlegenheit erfüllt.

Ich muss mich in meinem Brief an Prof. Snell sehr ungeschickt ausgedrückt haben, wenn ich den Eindruck erweckte, als seien es finanzielle Erwägungen gewesen, die bei meiner Antwort auf seine Anfrage eine Rolle gespielt hätten. Im Gegenteil, was ich auszudrücken versuchte, war, dass mir schon die Absicht der Jungius-Gesellschaft, meine eigenen Reisekosten in vollem Umfang zu bestreiten, in keinem Verhältnis zu der „Gegenleistung“ eines einzigen Vortrages zu stehen schien.

Es waren ausschliesslich die in meinem Brief an Prof. Snell angeführten persönlichen Umstände, die mich verhinderten, der für mich so schmeichelhaften und bei meiner alten Zuneigung für Hamburg sehr verlockenden Einladung Folge zu geben. Andernfalls würde ich mir ein Vergnügen daraus gemacht haben, zu kommen, und hätte in diesem Falle eher darauf bestanden, einen Teil meiner Reisekosten selber zu tragen, als dass ich es der Jungius-Gesellschaft zugemutet hätte, auch die meiner Frau zu übernehmen.

Dass jene Umstände sich im Laufe der nächsten Woche oder Monate ändern sollten, ist leider so unwahrscheinlich, dass ich es nicht verantworten kann, meinen Entschluss zu ändern und später möglicherweise durch eine plötzliche Absage Verlegenheit zu schaffen. Ich möchte aber auch Ihnen, sehr verehrter Herr Kollege, aussprechen dürfen, dass mich die mir zuge dachte Ehrung aufs höchst erfreut und gerührt hat, und dass Ihr grosszügiges Anerbieten meine Dankbarkeit – und mein Bedauern – wenn möglich noch steigert.

In ausgezeichnete Hochachtung

Ihr sehr ergebener  
Erwin Panofsky

EP: rs  
cc: Dr. Bruno Snell

---

<sup>a</sup> この手紙複写は先述 30 番（同日付、パノフスキーがスネルに宛てた手紙）に同封されていた。

<sup>b</sup> The Institute – New Jersey レターヘッド、便箋に印刷済み

32.

1959 年 8 月 14 日

エーリッヒ・ロートハッカーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙の複写（タイプライター稿、署名無し、1 頁）

所蔵：ULB Bonn, NL Erich Rothacker

請求記号：NL Rothacker I. Briefe an Otto Brunner, 1959. -2 Briefdurchschläge ohne Unterschrift, Deutsch.- Brief

14.8.59

Sehr geehrter Herr Kollege Brunner!

Mein letzter Brief an Sie ist nicht beantwortet worden. Die Sache hat sich aber inzwischen erledigt. Ich war etwas unglücklich gewesen über den kühnen Ausdruck „Sprache“ der Geisteswissenschaften. Ich habe mich aber inzwischen beruhigt und auch festgestellt, dass Sie das Wort in ähnlich weitem Sinne verwenden in Ihrer Einleitung zu „inneres Gefüge des Abendlandes“. Der Abschnitt interessiert mich überhaupt ungemein und wird auch in meinem Vortrag, der im Umriss fertig ist, berührt werden.

Nichtsdestoweniger wäre es mir sehr erwünscht, wenn ich etwas über die anderen Vorträge etwas hörte. Herr Schalk<sup>96</sup> hat mir von dem seinen erzählt, der sich ja thematisch mit dem meinen berührt.

Nochmals darf ich darauf hinweisen, dass ich zwar vom 29. früh ab an Ihrer Tagung teilnehmen kann (wenn es sein muss auch schon am 28.) dass ich aber am 29. abends in Harburg spreche und nachts nach Hamburg zurückkehre.

Ich hörte in Mainz Sie seien Rektor. Meine gratulierende Kondolenz!  
In alter Verehrung bin ich Ihr

33.

1959 年 8 月 27 日

---

<sup>96</sup> フリッツ・シャルク(Fritz Schalk, 1902–80)、オーストリア出身でドイツ各都市で研究と教育に従事したロマンス語学者、哲学者、第 2 次世界大戦の最中から戦後にかけての長期間(1941–70)、教授としてケルン大学の戦後復興に貢献。HAUSMANN, F. T., Schalk, Fritz, in: *NDB* 22 (2005), p. 551.

オットー・ブルンナーがエーリッヒ・ロートハッカーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、1頁）

所蔵：ULB Bonn, NL Erich Rothacker

請求記号：NL Rothacker I. Brief von Otto Brunner an Erich Rothacker, Hamburg, 27.08.1959 - 1 Br., masch., Deutsch.- Brief

JOACHIM JUNGIUS-GESELLSCHAFT DER WISSENSCHAFTEN EV  
HAMBURG<sup>a</sup>  
Der Präsident

Hamburg, den 27. 8. 1959

Herrn  
Prof. Dr. E. Rothacker  
B o n n  
Schumannstr. 41

Sehr geehrter Herr Kollege!

In der Anlage erlaube ich mir, ein Programm der Wissenschaftlichen Tagung der Joachim Jungius-Gesellschaft am 29. und 30. Oktober 1959 zu übersenden. Kleinere Änderungen, etwa in der Reihenfolge, können noch eintreten.

Die Joachim Jungius-Gesellschaft beabsichtigt – wie bei den bisherigen Tagungen –, die Vortragsfolge als selbständiges Buch<sup>b</sup> herauszugeben. Wir wären Ihnen daher sehr verbunden, wenn Sie das Manuskript<sup>c</sup> Ihres Vortrages uns zu diesem Zweck überlassen könnten. Darüber hinaus möchte ich Sie sehr bitten, uns in nächster Zeit in einigen Zeilen einen kurzen Hinweis auf den zentralen Gehalt<sup>d</sup> Ihres Vortrages zu übermitteln, damit wir rechtzeitig der Presse<sup>e</sup> einen Vorbericht zustellen können.

Am Anreisetag, Mittwoch den 28.<sup>f</sup> Oktober, ist ein gemeinsames Essen<sup>g</sup> im kleineren<sup>h</sup> Kreis im Ratsweinkeller<sup>i</sup> vorgesehen, und am Freitag, den 30.<sup>j</sup> Oktober, nachmittags<sup>k</sup>, findet ein Empfang<sup>l</sup> im Gästehaus<sup>m</sup> des Senats<sup>n</sup> „Haus Wedells“ statt. Offizielle Einladungen<sup>o</sup> werden Ihnen noch zugehen.

In ausgezeichneter Hochachtung  
Ihr sehr ergebener  
Brunner<sup>p</sup>

Anlage

(Prof. Dr. O. Brunner)

---

<sup>a</sup> JOACHIM – HAMBURG レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> 下線は手書き

<sup>c</sup> 下線は手書き

<sup>d</sup> 下線は手書き

<sup>e</sup> 下線は手書き

<sup>f</sup> 下線は手書き

<sup>g</sup> 下線は手書き

- 
- h 下線は手書き
  - i 下線は手書き
  - j 下線は手書き
  - k 下線は手書き
  - l 下線は手書き
  - m 下線は手書き
  - n 下線は手書き
  - o 下線は手書き
  - p Brunner 手書き

### 34.

1959年10月20日

エルヴィン・パノフスキーがオットー・ブルンナーに宛てた手紙の複写  
(タイプライター稿、署名無し、2頁) <sup>a</sup>

所蔵：BSB München, NL Bruno Snell

請求記号：Nachlass Bruno Snell Ana 490.B.IV. Panofsky, Brief von Erwin  
Panofsky an Otto Brunner, Beil.z.Nr. 11

The Institute for advance study Princeton, New Jersey<sup>b</sup>

Princeton, den 20. Oktober 1959

Herrn Prof. Dr. Otto Brunner  
Präsidenten der Joachim Jungius-Gesellschaft,  
Edmund-Siemers-Allee 1,  
Hamburg  
Deutschland.

Sehr verehrter Herr Kollege:

Gestatten Sie mir, Ihnen für Ihr freundliches Schreiben vom 16. Oktober meinen verbindlichsten Dank auszusprechen. Da ich es mir leider versagen musste, der so ehrenvollen Einladung der Joachim Jungius-Gesellschaft Folge zu leisten, kommt mir die Nachricht, dass ich die mir immeritissimo zugesprochene Medaille hier werde in Empfang nehmen dürfen, als eine grosse und, wie ich kaum zu sagen brauche, freudige Ueberraschung. Hierzulande gibt es keine Ehrungen „in absentia,“ und als ich mich gezwungen sah, auf ein persönliches Erscheinen in Hamburg zu verzichten, nahm ich es als selbstverständlich an, dass dieser Verzicht ipso facto einen Verzicht auf die mir zgedachte Auszeichnung bedeute. Nun gestellt sich zu der Genugtuung, die mir bereits die Absicht meiner Hamburger Kollegen bereitet hatte, die Freude, diese Absicht wider alle Erwartung verwirklicht zu sehen. Bei der dankbaren Anhänglichkeit, mit der ich auf meine Hamburger Jahre zurückblicke und stets zurückblicken werde, betrachte ich die Verleihung der Joachim Jungius-Medaille nicht nur als eine hohe akademische Ehre

sondern auch – oder vielmehr ganz besonders – als ein Symbol dieser Verbundenheit. //

In diesem Sinne möchte ich Ihnen, sehr verehrter Herr Kollege, meinen wärmsten Dank aussprechen und zugleich sowohl der Joachim Jungius-Gesellschaft als auch dem „gelehrten Hamburg“ als ganzem meine besten Zukunftswünsche darbringen dürften.

In auszeichneter Hochachtung  
Ihr sehr ergebener  
Erwin Panofsky

EP: rs

CC: Dr. Bruno Snell

---

<sup>a</sup> この手紙の複写は後述 36 番（1959 年 12 月 7 日付け、パノフスキーがスネルに宛てた手紙）に同封されていた。

<sup>b</sup> The Institute – New Jersey レターヘッド、便箋に印刷済み

### 35.

1959 年 11 月 13 日

オットー・ブルンナーがエーリッヒ・ロートハッカーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、1 頁）

所蔵：ULB Bonn, NL Erich Rothacker

請求記号：NL Rothacker I. Brief von Otto Brunner an Erich Rothacker, Hamburg, 13.11.1959 – 1 Br., masch., Deutsch.- Brief

JOACHIM JUNGIUS-GESELLSCHAFT DER WISSENSCHAFTEN EV  
HAMBURG<sup>a</sup>  
Der Präsident

Hamburg, den 13. Nov. 1959

Herrn

Prof. Dr. E. Rothacker

B o n n

Schumannstr. 41

Sehr geehrter Herr Kollege!

Mit einigem Abstand von der Tagung, über die ich allgemein beifällige Urteile hörte und die auch meiner Ansicht nach im Hinblick auf das, was dargestellt werden sollte, als ein Erfolg betrachtet werden kann, möchte ich Ihnen noch einmal herzlich danken für Ihre Teilnahme und den wesentlichen Beitrag, den Ihre Ausführungen zur Klärung dieser Fragen bedeuten.

Es würde mich sehr freuen, wenn auch Sie einige Anregungen von Ihrem Hamburger Besuch mitnehmen könnten.

Mit herzlichem Dank und freundlicher Empfehlung bin ich

Ihr ergebener  
Brunner<sup>b</sup>  
(Prof. Dr. O. Brunner)

---

<sup>a</sup> JOACHIM-HAMBURG レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> Brunner 手書き

36.

1959 年 12 月 7 日

エルヴィン・パノフスキーがブルノ・スネルに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、2 頁）<sup>a</sup>

所蔵：BSB München, NL Bruno Snell

請求記号：Nachlass Bruno Snell, Ana 490.B.IV. Panofsky, Brief von Erwin Panofsky an Otto Brunner, Beil.z.Nr. 11

The Institute for advanced study Princeton, New Jersey<sup>b</sup>

December 7, 1959

Professor Bruno Snell  
Heilwigstr. 3  
Hamburg 20, Germany

Dear Snell:

The day before yesterday I did receive the Jungius medal and the accompanying document. Since I have already expressed my gratitude to Professor Brunner (whom I do not know), I don't wish to write him once more. But I feel that I owe a full report to you as the instigator of it all and, more important, as an old friend.

The Consul General in New York, a very agreeable gentleman named Dr. Federer, had notified me in due form and asked whether I wished a kind of ceremony in the presence of my New York friends. This, of course, I politely declined and suggested instead that I might call on him on December 5<sup>th</sup>. To this very kindly agreed and hospitably received me in his very pleasant house in the presence of only his cultural attaché – or, rather attachée – a very attractive re-haired lady, half English and half German by extraction, who is an art historian herself. Over a glass of sherry the dedication took place in due form, and I came away.

The surprise came in the afternoon when I had to give a lecture in the Frick Collection which you certainly remember. Unbeknownst to me, the aforementioned cultural attachée, who seems to be on friendly terms with the Assistant Director of the Frick Collection and made her personal appearance at the lecture itself, had told the story of the Jungius medal to this young man who in turn had imparted it to his chief. As a result, this chief who happens to be one of my earliest students in this country, used the customary introduction to tell the audience of how I had been dismissed in 1933 by that famous cable sealed with a strip of paper that bore the inscription “CORDIAL EASTER GREETINGS WESTERN UNION” and then proceeded to tell that now, just about a quarter of a century later, Hamburg had honored me by the highest distinction it could bestow. So, without

my knowledge, the conferment of the medal did become a semi-public event, and I must say that the whole thing did not fail to touch me rather deeply. “Denn,” as Fontane says, “man bleibt ein Schaf”.

The document – what here would be called “citation” – both elated and slightly amused me. The appreciation of my “umfassendes Lebenswert” sounds very much like an obituary and made me feel like the octogenarian from Maine who, when asked whether he had lived all his life in Millinocket, responded: “Not yet.” But what I really and seriously must object to is // that the citation credits me with having “opened new paths” in the humanities. This, quite honestly, is precisely what I have not done and never presumed to do. On the contrary, I always conceived of my function as that of one who tries to see to it that the old paths are not forgotten or permitted to become impassable by underbrush. In other words, far from being a pioneer, I have tried to be an eclectic attempting to apply as many of the accepted methods as can be comfortably handled by a single individual. The real pioneers were people like Riegl, Wöflin, Warburg, and Vöge – people from whom I have learned as much as I could but whom I could never hope to equal, let alone to surpass.

Be that as it may, the whole affair was heartwarming, and I should like to thank you (and, if you have a chance to mention it to Professor Brunner) the Jungius-Gesellschaft one more.

With all good wishes for a Merry Christmas and a Happy New Year in which Dora wholeheartedly join me,

Yours as ever,  
Pan<sup>c</sup>  
Erwin Panofsky

EP:rs

---

<sup>a</sup> この手紙に前述 34 番 (1959 年 10 月 20 日付け、パノフスキーがブルンナーに宛てた手紙の複写) が同封されていた。

<sup>b</sup> The Institute – New Jersey レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>c</sup> Pan 手書き

### 37.

1969 年 12 月 15 日

オットー・ブルンナーがラインハルト・コゼレックに宛てた手紙 (タイプライター稿、署名有り、1 頁)

所蔵：DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号：Bestand, Nachlass A:Koselleck, Reinhart – Brunner, Otto an Koselleck, Reinhart [Briefe] Hamburg, 1969–1973. - 3 Br. 3 Bl. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

UNIVERSITÄT HAMBURG

HISTORISCHES SEMINAR

Historisches Seminar

2 Hamburg 13, Von-Melle-Park 6, IX<sup>a</sup>

Professor Dr. O. Brunner

Herrn  
Professor Dr. R. Koselleck  
69 Heidelberg  
Bergheimerstr. 104

Hamburg, den<sup>b</sup> 15.12.1969

Sehr geehrter Herr Kollege!

Ich danke Ihnen für Ihren Brief und übermittle Ihnen meine besten Genesungswünsche.

Die Angelegenheit Reimann ist außerordentlich ärgerlich. Trotz aller meiner Bemühungen hat er sich bisher nicht sehen lassen, ja – in dem von uns gemeinsam benutzten Zimmer liegen noch immer von ihm entliehene Bücher herum und die Schreibtischschubladen sind mit seinen Papieren gefüllt. Ich hoffe, daß der von ihm erarbeitete Text ohne Schwierigkeit umgestaltet werden kann.

Ich hatte früher zu ihm ein uneingeschränktes Vertrauen, sehe mich aber jetzt sehr enttäuscht. Fräulein Unverhau, die diese Arbeiten übernehmen soll, stände vom Ende des Wintersemesters an zur Verfügung, denn im Augenblick ist sie Korrekturassistentin. Dann könnte sie mir vor allem für den Artikel „Herrschaft“ an die Hand gehen.

Sobald ich das von Herrn Reimann erarbeitete Material in der Hand habe, gebe ich Ihnen nähere Nachricht.

Mit besten Grüßen  
Ihr sehr ergebener  
Brunner<sup>c</sup>

---

<sup>a</sup> UNIVERSITÄT – IX レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> Hamburg, den レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>c</sup> Brunner 手書き

### 38.

1970年1月6日

オットー・ブルンナーがブルノ・スネルに宛てた手紙(手稿、1頁)

所蔵：BSB München, NL Bruno Snell

請求記号：Nachlass Bruno Snell Ana 490.B.IV. Brief von Otto Brunner an Bruno Snell, Hamburg, 06.01.1970. - 1 eBU. - Brief  
Otto Brunner

6.1.70

2 Hamburg 55  
Wulfsdal 3  
Tel 863404

Sehr verehrter Herr Kollege!

Zu dem schmerzlichen Verlust, den Sie eben erlitten haben, bitten meine

Frau und ich unser wärmsten Beileid entgegenzunehmen.

Ihr  
Otto Brunner

39.

1971 年 12 月 14 日

ラインハルト・コゼレックがオットー・ブルンナーに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、2 頁）

所蔵：DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号：Bestand, Nachlass A:Koselleck, Reinhart – Koselleck, Reinhart an Brunner, Otto [Briefe], 14.12.1971. - 2 Bl. Durchschl. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

Prof. Dr. R. Koselleck

14.12.1971

Herrn  
Prof. Dr. Otto Brunner  
2000 Hamburg 55  
Wulfsdal 3

Sehr verehrter Herr Brunner,

da wir nunmehr den ersten Band unseres Lexikons redaktionell abschließen, müssen wir uns endgültig auf einen Titel einigen. Der Arbeitstitel Historisches Lexikon der Politisch-Sozialen Begriffe der Neuzeit ist natürlich zu umständlich und auch nicht werbewirksam. Wir müssen uns nun als Herausgeber auf einen Titel einigen, weshalb ich Ihnen eine Liste möglicher Titel beilege. Es ist nicht ganz leicht einen treffenden Titel zu finden, da wir nur rund 120 Stichworte behandeln, also der lexikalische Charakter nicht gewahrt wird. Außerden[!] konzentrieren wir uns vorzüglich auf die Neuzeit, wenn wir auch bis in die Antike und in das Mittelalter zurückgreifen. Dadurch verliert das Lexikon den Charakter eines reinen Nachschlagewerkes. Schließlich behandeln wir vorzüglich den deutschen Sprachraum, was eine weitere Einengung ist, die im Titel eigentlich auftauchen müßte.

Im Augenblick bevorzugen wir folgende beide Titel:

Lexikon geschichtlicher Grundbegriffe der politisch-sozialen Sprache im neuzeitlichen Deutschland

oder mit dem Untertitel

Untersuchungen / Beiträge / Studien zur politisch-sozialen Sprache / Semantik vorzüglich im neuzeitlichen Deutschland.

Der andere Titel wäre://

Geschichtliche Grundbegriffe

Lexikon zur politisch-sozialen Sprache im neuzeitlichen Deutschland oder Beiträge zur politisch-sozialen Semantik.

Die andern[!] Titel, die auf dem beiliegenden Blatt verzeichnet sind, scheinen uns weniger präzise, aber vielleicht fällt Ihnen noch ein besserer Titel ein? Wir wären Ihnen jedenfalls sehr dankbar, wenn Sie uns Ihre Stellungnahme zukommen lassen wollten.

Mit freundlichen Grüßen, auch von Herrn Conze, bin ich

Ihr Ihnen sehr ergebener

R<sup>a</sup>

---

<sup>a</sup> R 手書き (ただし R か否か正確には不明)

40.

1972 年 1 月 3 日

オットー・ブルンナーがラインハルト・コゼレックに宛てた手紙 (タイプライター稿、署名有り、1 頁)

所蔵 : DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号 : Bestand, Nachlass A:Koselleck, Reinhart – Brunner, Otto an Koselleck, Reinhart [Briefe] Hamburg, 1969–1973. – 3 Br. 3 Bl. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

UNIVERSITÄT HAMBURG

HISTORISCHES SEMINAR<sup>a</sup>

Professor Dr. O. Brunner

Historisches Seminar

2 Hamburg 13, Von-Melle-Park 6, IX<sup>b</sup>

Herrn

Professor Dr. Reinhard Koselleck

Arbeitskreis für moderne Sozialgeschichte

69 Heidelberg

Bergheimer Landstr. 104-106

3.1.1972

Lieber Herr Kollege!

Mir gefällt der erste der von Ihnen vorgeschlagenen Titel am meisten. Ein Obertitel „Geschichtliche Grundbegriffe“ wäre doch recht irreführend.

Ich hatte die Absicht, zur Tagung nach Heidelberg zu kommen, muss aber leider absagen, da sich meine Frau die Hand gebrochen hat und ich mich auch nicht ganz wohl fühle.

Mit besten Wünschen zum Jahreswechsel

Ihr Brunner<sup>c</sup>

---

<sup>a</sup> UNIVERSITÄT – SEMINAR レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> Historisches – IX レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>c</sup> Brunner 手書き

41.

1972 年 4 月 6 日

オットー・ブルンナーがラインハルト・コゼレックに宛てたカード（手稿、1 頁）

所蔵：DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号：Bestand, Nachlass A:Koselleck, Reinhart – Brunner, Otto an Koselleck, Reinhart [Briefe], Hamburg, 06.04.1972. - 1 Bl., Deutsch. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

Otto Brunner

2 Hamburg 55

Wulfsdal 3

Tel. 863404<sup>a</sup>

6.4.72

Sehr verehrter Herr Kollege!

Ich finde Ihren Text ausgezeichnet und sehe keinen Grund, irgendetwas zu ändern.

Mit besten Grüßen

Ihr

Otto Brunner

---

<sup>a</sup> Otto – 863404 レターヘッド、カードに印刷済み

42.

1973 年 2 月 19 日

オットー・ブルンナーがラインハルト・コゼレックに宛てた手紙（タイプライター稿、署名有り、1 頁）

所蔵：DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号：Bestand, Nachlass A:Koselleck, Reinhart – Brunner, Otto an Koselleck, Reinhart [Briefe] Hamburg, 1969–1973. - 3 Br. 3 Bl. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

UNIVERSITÄT HAMBURG

HISTORISCHES SEMINAR<sup>a</sup>

Professor Dr. O. Brunner

Historisches Seminar

2 Hamburg 13, Von-Melle-Park 6, IX<sup>b</sup>

Herrn Professor Dr. R. K o s e l l e c k  
69 Heidelberg  
Bergheimerstr. 104

19.2.1973

Lieber Herr Kollege!

Haben Sie sehr herzlichsten Dank für die Übersendung des ersten Bandes und für die Einladung nach Heidelberg. Leider ist es mir an den angegebenen Terminen nicht möglich zu kommen. Ich muss, schon um meiner Arbeitsfähigkeit willen, meine Reisen einschränken. Herrn Conze hoffe ich in München am 13./14. März zu treffen. Inzwischen versuche ich, in den Artikel „Feudalismus“ zu überarbeiten und ihn in nächster Zeit fertigzustellen.

Mit vielen Grüßen  
Ihr sehr ergebener

Brunner<sup>c</sup>

---

<sup>a</sup> UNIVERSITÄT – SEMINAR レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>b</sup> Historisches – IX レターヘッド、便箋に印刷済み

<sup>c</sup> Brunner 手書き

43.

1973年8月15日

オットー・ブルンナーがヘアマン・ハインペルに宛てた手紙(手稿、2頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Ms H Heimpel E 1 199-8

Dr. Dr. h.c. Otto Brunner  
o. Professor a. d. Universität  
2 Hamburg-Blankenese  
Wulfsdal 3<sup>a</sup>

15.8.73

Lieber Herr Kollege!

Leider ist mir jetzt erst möglich, Ihnen für Ihren Brief zu meinem 75. Geburtstag zu danken und damit meine Glückwünsche zu Ihrer Verheiratung zu verbinden.

Nachdem ich den meisten Gratulanten mit einer gedruckten Karte gedankt, kam ich nicht dazu, an einige mir näherstehende Kollegen einen Brief zu schreiben.

Es war etwas wie Lähmung in mir, verstärkt durch die schwere Erkrankung meiner Frau, die an der Galle operiert wurde und 2 ½ Monate im Krankenhaus lag. Im Juli habe ich mir dann den linken Unterschenkel gebrochen, jetzt kann ich wenigstens mit Krücken wieder etwas gehen.

So hoffe ich denn in // nächster Zeit wieder aktiver zu werden.

Mit vielen Grüßen  
Ihr

Otto Brunner.

---

<sup>a</sup> Dr. Dr. – Wulfsdal 3 スタンプ

44.

1975 年 7 月 7 日

オットー・ブルンナーがハンス・エーリヒ・ノーサックに宛てたカード  
(手稿、2 頁)

所蔵：DLA Marbach, NL Hans Erich Nossack

請求記号：Depositum in der A-Reihe, Nachlass D: Nossack, Hans Erich,  
HS.NZ78.0004 (Akquisitionsnummer)

Hamburg, 7.7.75

Sehr geehrter Herr Nossack

Ich möchte mich sehr herzlich für Ihre Begleitung bis Altona bedanken.  
Auch die Sache funktionierte bestens. Allerdings müsste eine Woche zur  
Durchuntersuchung im Krankenhaus // bleiben, erfreulicherweise ohne Ergebnis.

Mit besten Grüßen

Ihr

Otto Brunner

45.

1978 年

オットー・ブルンナーからヘアマン・ハインベルに宛てたカード (タイ  
プライター稿、署名無し、1 頁)

所蔵：SUB Göttingen, NL Hermann Heimpel

請求記号：Cod Ms H Heimpel E 1 199-9

1978

ES SIND MIR SO VIELE GLÜCKWÜNSCHE, BLUMEN UND  
GESCHENKE ZU MEINEM 80. GEBURTSTAG ZUGEKOMMEN, DASS ICH  
NUR AUF DIESE WEISE MEINEN HERZLICHSTEN DANK AUSSPRECHEN  
KANN.

OTTO BRUNNER

46.

1982 年 9 月 7 日

ラインハルト・コゼレックがテオドア・シーダー<sup>97</sup>に宛てた手紙 (タイプ

---

<sup>97</sup> テオドア・シーダー(Theodor Schieder, 1908–84)、ドイツ出身の歴史家、ミュンヘンで

ライター稿、署名有り、2頁)<sup>98</sup>

所蔵：DLA Marbach, NL Reinhart Koselleck

請求記号：Nachlass A:Koselleck, Reinhart - Koselleck, Reinhart an Schieder, Theodor [Briefe] Bielfeld, ohne Ort, 1975-1982, 8 Br. 18 Bl. [HS.2008.0095 (Akquisitionsnummer)]

Prof. Dr. R. Koselleck  
3225 + 3239

Herrn  
Prof. Dr. Theodor Schieder  
Universität Köln  
Historisches Seminar  
5000 Köln 41

7. September 1982

Sehr verehrter, lieber Herr Schieder,

ich danke Ihnen vielmals für die Übersendung Ihres Vortrages über Friedrich den Großen und Machiavelli. Mit Spannung habe ich verfolgt, wie Sie die realpolitischen Programmsätze bereits im ‚Antimachiavelli‘ nachweisen. Was die umstrittene und sicher mi Vorbehalt zu behandelnde These der religiösen Grundlage Friedrichs anbelangt, so darf ich Sie auf eine meisterhafte Charakteristik verweisen, die Ranke beiläufig in der Beschreibung der Schlacht von Hohenfriedberg geliefert hat. In diesem Kapitel aus der preußischen Geschichte beginnt Ranke die stoische Grundhaltung Friedrichs zu analysieren, um am Ende, nach der siegreichen Schlacht, Anspielungen auf den Eingriff Gottes durch den Mund Dritter hören zu lassen, auf die Friedrich – vielleicht – reagiert haben mochte.

Da Sie gerade dabei sind, sich dem spannenden Thema der Benennung ‚des Großen‘ zuzuwenden, möchte ich Sie auf einen kurzen Hinweis aufmerksam machen, den ich einmal in einem Aufsatz vorgebracht habe. Ich versuche die Bezeichnung ‚Friedrich der Einzige‘ dem beginnenden historischen Bewußtsein zuzuordnen: in einem Aufsatz, dessen Kopie ich Ihnen zusende (vgl. S. 20).

Ich darf die Gelegenheit wahrnehmen, noch kurz über die Beisetzung von

---

歴史学を学び、1937年ナチ党入党、ナチ党の東方政策に協力、ユダヤ人政策を推進、1942年当時ドイツ領であったポーランドのケーニヒスベルク大学教授、終戦の前後にドイツのバイエルン南西へ逃亡し大学職から離れる。1948年ケルン大学教授として歴史学界に復帰、戦後ドイツ史学を牽引した。HAAR, I., Theodor Schieder, in: FAHLBUSCH, M. et al. (ed.), *Handbuch der völkischen Wissenschaften. Akteure, Netzwerke, Forschungsprogramme*. Bd. 1, 2. Aufl., Oldenbourg/Berlin 2017, pp. 714–725; ベーター・シエトラー〈木谷勤他訳〉『ナチズムと歴史家たち』261頁。

<sup>98</sup> この手紙の第3段落でコゼレックがシーダーにブルンナーの葬儀のことについて叙述しており、その手紙の原文、もしくは複写がコゼレック旧蔵書の中に保管されていたため、ここに翻刻した。

Herrn Brunner zu berichten. Die Feier war schlicht und wurde mit zwei Ansprachen von zwei Kollegen eröffnet, deren einer Buisson war. Leider wurde überhaupt nicht erwähnt, in welcher Beziehung Brunner zum Nationalsozialismus gestanden hat, eine Beziehung, die ja sein Verhältnis zu der Wiener Universität erheblich beeinträchtigt hatte. Ich fand es bedauerlich, daß nach 35 Jahren über solche Fragen nicht wenigstens // historisch gerechte Wendungen gefunden werden. Es ist ja eine Ironie der Geschichte, daß der methodische Durchbruch von Brunner nicht zuletzt auf seiner Nähe zum nationalsozialistischen Volksbegriff beruht hatte.

Den Entschluß der Historischen Kommission, die Nobelakten nicht zu edieren, kann ich vollauf verstehen. Daß die Anträge, die aus den europäischen Universitäten herrührten, so knapp und wenig ergebnisreich sind, war mir nicht klar. Hinzu kam eine Information, die ich von Herrn Lepenies in Paris erhalten hatte: Eine schwedische Bearbeiterin scheint in einer gewissen Spannung zu den Bielefelder Kollegen zu stehen, so daß hier bisher unbekannte Schwierigkeiten gelauert hätten, die sich nun von selbst erübrigen werden.

Anlage

17 Studien zum 18. Jh.<sup>a</sup>

Es grüßt Sie herzlich  
Ihr  
R<sup>b</sup>

---

<sup>a</sup> 17 Studien zum 18. Jh. 手書き

<sup>b</sup> R 手書き (ただし R で正しいかどうか不明)